SHAKESPEARE
And His Universality

エ・エーチ・ストロング著

文學士 佐藤 清 譯

シェークスピア及び彼の普遍性

宗教と文藝叢書第九篇

始

『宗教と文藝』叢書第九篇

SHAKESPEARE AND HIS UNIVERSALITY

エ・エーチ・ストロング著
文學士　佐藤清譯

シェークスピア及び彼の普遍性

大正 12.3.28 内交

シェークスピアの神秘なる偉大——想像の職能——眞の藝術は創造的——普通性の表現なる詩——藝術の最高形式なる劇詩——散文よりも韻文に多くの眞理がある——想像の異常の使用——普遍性は非人格性を含む——時代の產物なるシェークスピア——彼の青年時代は放蕩無頼にあらず——彼の詩作の前半期——後半期——シェークスピアは自己の天才を知れるか——野卑なる人々の趣味に迎合す——普遍性の意義——性格暴露——性格の發展——倫理的宗教的觀念——自然主義的不可思議論的にあらず——人間の自由と責任——罪は無智の結果でない——個人的の罪と遺傳的の罪——生來の墮落に對する責任——良心は應報を豫想す——未來に於てばかりでなく、現世に於ても——基督教の立證者なるシェークスピア——性格と共に比喩の創造者——シェークスピアの措辭——シェークスピアの制限——人間性の最大の詩人

シェークスピア及び彼の普遍性

シェークスピアに就て何かを書かうとするものは、ハムレットの如き感、即ち自分の力以上の仕事を企てるといふ感じがする。文學界に於ける、如何なる偉大なる名も、彼ほどに多く書かれたものはない。そして此事自身が彼の最も偉大なる名であることを示してをる。總ての小なる天體が、此太陽の周圍に廻轉しつゝ、彼等の程度に從つて、彼の光を反射せんと努めてをる時に、新くして眞なる何事かを示さんとするは、望なきことゝ思はれるかもしれない。

シェークスピアを取扱ふ時、我々は自然の偉大なる作用の一を取扱つてをるやうに思はれる。彼には神秘なる偉大がある。彼は啻に個人的の詩人であるばかりでなく、世界思想に於ける偉大なる根本的の力である。彼は多方面の才人と呼ばれた。彼自身の人格は殆ど彼の作の中に沒し、作はそれ自身の中に沒して、しかも彼の時代のすべての多樣なる世俗的生活を代表し、之を我々の爲に明かにしてをる。しかし彼の功績はこれよりも深い眞なるものがある。彼は方處及び時間を通じて、一切

の世俗的人間生活の根本的の調子を奏でた。彼の詩は如何なるものにも勝つて、如實に自然を寫し、アリストートルが「普遍性の表現」と言つた詩の定義にかなつてをる。

學童等が「德義論」の課題をうけた時、彼等がこの巨大なる抽象的問題と爭ふ有樣はあはれであるが、或者はこの問題の偉大そのものに一の興味を覺えて、後年、成人の後、これが理解にもつと鋭い分析の力を注ぐものがある。シェークスピアに關して書く事は、德義に關して書くやうなものである。學童の方法に依て成功することは不可能である。たゞ廣き哲學の適用のみが、價値ある結果を齎すであらう。故に私はシェークスピアに就て言はんと欲することの序言として、想像の眞の地位と、職能、及び想像的表現の手段としての劇詩に關して、簡畧なる敍述をしたいと思ふのである。

（二）

想像をば理性の庶子と考へ、之を拒絶して、出來るだけ眼界の外に逐ひ出さうとすることは、甚だしき誤謬である。是れはプラトーの見解であつた。彼は知識を愛した。彼は如實に事物を見んと欲した。彼の見解に依れば、想像は假作のみを作る。そして假作は非眞理である。想像と哲學とは互に一致しない。故にプラトーはすべての詩人を彼の理想共和國から追放してをる。近代の偏狹と禁欲主義とは、屢々プラトーの謬見を再現して、小説及び美術を禁斷した。すべて是等の謬見を訂正するには、想像と他の心的作用との關係を、適切に、理解すればいゝのである。

想像は、其最も明瞭な意味に於て、心像を作る知力である。この意味に於て、想像は一切の進んだ心的過程の補助、及び條件である。我々が最初に自我と非我とを知覺するのは、慥かに事物の直接の接觸である。しかし我々の後の知識は、此直接知覺と、過去の經驗によつて與へられたる心像との聯合である。例へば私が葉の中に一點の赤い光を見る。私の心の中に貯へられてをる心像を之に附け加へるに非らざれば、私は之を林檎とは呼び得ない。記憶でさへも、想像なしには不可能である。自我の以前の狀態を代表するものとして、過去の心像の認識と共に、過去の心像がなくてはならない。新しき心像に關するすべての判斷は、想像を含んでをる。如何となれば想像がなければ、新舊を比較する能力が、我々に無いからである。心像を作る能力のみが、あるものとないものとを聯合し、特定の事物と、之に適用せらるる一般的標準とを一緒にすることが出來るのである。

獸類は知覺を有し、又之を思ひ出すことが出來る。犬でさへ低級の想像力を有し、夢を見ることが出來る。夢の心像と、現在の經驗の實際知覺とを區別し得る時

のみ、想像は、合理的で、人間的である。しかし自由なる合理的想像もある。即ち是は心そのものによつて決定せらるゝ秩序に於て、過去の知覺の再聯合を爲す力である。想像は再現力と共に構成力をもつてをる。そは不適當なものを省いて、本質的なものを合一する。

自己の周圍に世界を結合し、又代表的の形式の下に之に秩序と統一とを與へる、人間の想像力の使用は、人間の經驗の廣さと眞理を見る洞察力とに比例する。世界を支配する者は想像の人だとナポレオンが言つた。ティンダルは、極めて適切に、想像を科學的に使用することに就て、かく言つてをる。「一部分得たる知識を滋養物として、之に加ふるに理性の制限を以てするならば、想像は物理的發見者の最も偉大なる道具となる」と。サー・アイザック・ニュートンの發見せる如き、偉大なる歸納は、民衆の目に隱れてをる眞理の世界に入らんとして、合理的想像力を以てしたに過ぎない。經驗に先んずる臆説は、決して想像なしに作られ得ない。ケプラアは自己流に神の思想を考へてをる。そして彼の發見は、理性の作であると同じく、想像の作である。科學の如く、藝術は本質的觀念に於て宇宙を改造し、事物の眞相を示さんとする人間の試みである。

それで藝術は模倣でなくして創造である。創造的想像は、想像の最も合理的な、最も高貴なる形式である。如何となればそは人物と事件を再現せんとするものでなくして、人物と事件の成形的觀念、即ち是等のものゝ代表し、且つ是等のものにその價値を與へる代表的思想を再現せんとするにあるからである。成る程、繪畫に於けるヴェラスチャーギン、及び文學に於けるゾラの如き、藝術がある。是等の藝術は高貴なるものであるにしても、或は厭ふべきものであるにしても、一切現實のものを微細に描く事を以て目的とするものである。しかし此寫實主義は、眞に、寫實的ではない。如何となれば是れは事物の眞相に徹しないからである。是れは身體の爪や髮を描いてはをるが、生命の暗示を與へない。是れは神の存在を信じないから、宇宙の中に、靈魂も、思想も、威嚴も、價値ある目的も、見ないのである。理想は、現實の中の最も現實なる要素であることを見ないから、現實と實際とを混同してしまふ。ハットンの暗示した如く、此原理に立てば、食人種の饗宴の繪は美術品であるかもしれない。そして詩は愛なき肉欲の描寫に沒頭するであらう。

併し、神は存在し、宇宙は合理的宇宙である。此現象世界を通じて、他の本體の世界が自己表現をなさんと努めてをる。神の創造的活動は、實に、根本的に、理智あるものに對して、神的觀念の不斷の提示である。神は外界の萬有の中に、その眞理の説明を與へてをる。是れ我々自身の創造力を使用する方法を敎へられん

爲である。そして人間の創造的活動は、この同じ神的觀念をば、想像によつて發見し、之を新しく聯合して、新しき形式とすることである。若し形式が單に抽象的であるならば、我々は此想像の作を哲學と呼び、具體的であるならば、その結果を藝術と呼ぶのである。

人間は自由意志があるから、是等の觀念を自己の思想と生活とに於て、否定し、反對することが出來る。人間は誤謬を想像し、惡を計畫することが出來る。そこで藝術は技巧的となる。――藝術は、かくして、蛇に多くの色彩を與へ、惡を包むに厭はしき美を以てするであらう。しかも倘、對照によつて、その刺戟及び目的となるべき神的眞理を說明するであらう。眞の藝術家は獨斷主義者で、意識的に德義の說敎者でなくてはならない。かういつた結論を我々は爲すのではない。たゞ道德と宗敎とが、その人の生命ある原理となつてをる際にのみ、深く事物の眞相を看破して、眞の藝術家となれるといふにとゞまるのである。

(三)

扨て、詩は藝術中、最大にして最貴なるものである。そして詩は哲學と共に、宇宙の生命の中に突入すると同時に、他の如何なる藝術にも優つて、宇宙の生命を人間の心意と心情とに示す力をもつてをる。私は旣にアリストートルが詩を呼んで

「普遍性の表現」と言つた言葉をあげた。私は更にこの同じ哲學者の深い格言を附け加へる必要がある。即ち「詩は歷史よりも、もつと哲學的で、もつと高い價値がある」と。此理由は遠くに求める要はない。歷史は實際を取扱ひ、隨つてその問題のすべての缺點と制限とをもつてをる。これに反して、詩は、典型と、多くの眞理とを我々に示すのである。歷史は單に一の具體的例證を與へ得るに過ぎない。

詩は歷史よりも普遍的である。詩の中には、神的觀念が無用のものを取り捨てられて、現はれる。シェークスピアの史劇中の人物と、英國「年代記」の中に現はれてをる同一の人物とを比較せよ。シェークスピアはかく人物の主要なる特色を捉へて、如何なる歷史家よりも矛盾なく之を提示したと言ふに躊躇しない。かの騷しき時代の精神、かの時代の熱烈なる忠愛の念を理解し、野蠻なる殘虐と、國民生活、及び天才をば、鮮かに、活動的に、描寫せる點に於ては、歷史は到底劇を凌ぎ得ないのである。

詩は、哲學と歷史に優る是等の長所を有するが、此長所を極端までもつてをる一種の詩がある。それは即ち劇詩である。劇詩に於ては、謂はゞ、人生が改造されてをるのである。偉大なる活動の原理は我々の前に置かれてをるが、それらの原理が具體的の人物を動かしてをるのである。人間の模型が矛盾なく描寫せられてをるが、

而かもその周圍は自然である。めいめいのものが互に影響を與へたり受けたりしてをる。蜘蛛の巣のやうな事情は、性格を發展させる構造的細胞である。劇中の人物は、啻に自己を示すやうに工夫されてをるばかりでなく、自己を示す爲に語るやうに作られてをる。そして語りつゝ、自己を現はしてゆく。彼等自身の行爲が、その行爲に承認を與へ、或は之を否認する。詩人自身が之をなすのではない。我々が劇を讀み、或は聽く時に、世界はその假面をすてゝ、我々をその秘密の中にひき入れるやうに思はれる。我々自身の心、及び他人の心が、我々に開かれる。劇作家の創造的天才が、作中の人物に、生命の息を吹き込んでをるから、人物は生ける魂となり、決して死に得ない。多くの人々にとつて、オセロとリヤ、ロメオとハムレットは、クロムウェル、ナポレオン、ウォシントンよりも、もつと現實な、もつと強い、心的、及び道徳的發達の要素をもつてをる。

希臘悲劇が、多くの世紀が過ぎ去つた後も、依然として我々の心を摑んでをる所以のものは、高貴なる美術的形式を以て、人間の本源的愛情と恐怖とを示してをるからである。併し希臘時代には、人生は簡單であつた。近代の利害及び感情の複雜はまだ起らなかつた。家族及び國家に對する義務が、最大の行爲となる動機であつた。人間の心情は、まだ内省的にならなかつた。情欲の深みはまださぐられなかつた。婦人に對する男子の愛、又男子に對する婦人の愛は、まだ自意識的でなかつた。所謂ローマンスなるものは不可能であつた。

「基督教時代」は我々を更に偉大なる世界へ導いてをる。自然は、人をひきつける點に於て、人情に讓る。國家は、個人の爲に存在するものと考へられてをる。種族としての人間ばかりでなく、家族の各個人が尊重と犧牲との目的物である。單一の人間の靈魂が四大の戰よりももつと感激性に富んだ戰場である。近代生活を劇化することは、希臘人がなしたよりも、大なる事業である。この内外の新しき世界に於て生活し、且つ動いてゐるまゝの、偉大なる性格の模型を摑み、彼等が互に錯綜によりて作られる實相の、具體的にして矛盾なき表現をなすには、希臘人の決して有しなかつたやうな、廣き且つ強き創造的想像を要する。

希臘藝術が今尚生きてをる所以のものは、その中に普遍性を有するからである。希臘の彫像或は詩が、實現してをる單一の觀念、或は感情は、人類に共通なる觀念、或は感情である。併しコライオレイナス、及びシャイロック、及びヘンリ五世が、我々に示すところのものは、同じ觀念と感情とであるが、それらのものは多くの他の觀念、及び感情と爭ひ、そして無限の複雜せる境遇を貫いて、勝利或は敗衄に急ぐのである。シェークスピアは他の如何なるものよりも多く、人間の性格の一切の

現世的種々相をば、近代生活にあらはれてゐる無限の關係に於て、描くことが出來た。故に、我々は彼の普遍性に就て語り得るのである。

テニソンに就てかういふ話がある。或日、テニソンが、田舍の小川の端に立つて、その淵を見つめ乍ら、己を忘れて、水中の生活の無限の變化を、一心に瞑想してをるのを或友人が見た。それから彼は頭を上げて、「神は何といふ想像力をもつてをる方だ」と言つたに過ぎなかつた。併し小川は宇宙の縮圖に過ぎない。宇宙を秩序ある一の全體と考へてその中に

「常に生き且つ愛する一人の神、
一人の神、一つの法則、一つの要素、
萬有の進みゆく目的なる
一つの遠き神事」

を見るものは、歴史といふ大なる劇の筋を作り、その連續して起る場面を通じて大詰まで導きつゝある、神的及び創造的想像の不思議に、深く撃たれるであらう。

神の宇宙の經綸に與かり、神の想像を表現するは、詩人の特權である。實際世界ではなくして、實際世界を影としてをる理想、偶發的なる事情をとり除かれたる事物の眞髓、明かに暴露されたる人物、人間の行爲に依て決定せられる運命、事件の意味、——是等のものは詩人の取扱ふ事物であつて、こゝに於て詩人は詩人たると共に、豫言者であり、結果の豫見者、神の解釋者である。萬有の中に神は自己をよく示してをる。彼は永遠の眞理の奥に我々をひき上げる。一人の發達の道は、暫く孤獨に進んで往くが、それから遙かに他人（その他人の過去の歴史は、皆、無意識に彼との接觸の爲に準備された）の道の中に、解く事が出來ないやうに入り交つてしまふものであるか。ヂョージ・エリオットは、同様に、一の小說中に、ウェンドルンとブランドコートとを我々に示し、シェークスピアはキング・リアに於て、二つの單獨なる物語を處理する。二つの物語は、劇の危機に於てのみ一となるのである。

時代錯誤は、理想的眞理を役に立たせる限り、詩に於て排斥すべきではない。舞臺の上に、兩軍が極く接近して陣營を張つてをるので、同じ幽靈が、代る代る兩軍に語れるやうになつてをる、「リチャード三世」に於て、王位を爭ふ二人の相手を認めることは、強い想像力を必要とした。併し時空が、詩に於て、滅却される所以のものは、詩は普遍性の表現であるからである。我々は之をシェークスピアの缺點と呼ぶべきか。宛も變貌せる救主のをる山の絕頂と、彼が救ひに來た、惱める人間のをる山の麓とを、並べてをる、ラファエルに對しても、同じ爭が生ずるわけである。

（四）

それで、詩は、その中に散文より少量の眞理をもつてをるのでなくして、散文より多くの眞理をもつてをるのである。詩は、皮相短見者流のないがしろにせる、人生の深き事實を摑んで、之を表現する。ミルトンが詩を稱して「簡單で、感覺的で、情熱的」と呼んだ時、彼が「簡單」と言つた意味は、自然、及び心の法則に一致するといふ此事であつた。「簡單」は、眞の合理性といふ觀念を含んでをる。しかし若し詩が最も高き理性の表現であるならば、詩と狂氣とが、人間の思想の中に結び付くのはどういふわけであるか。ドライデンの言葉を聽け。

「天才は狂に結びついてをる。
そしてうすきしきりが、その境界線をくぎつてをる。」

又セネカの言葉を聽け。彼はかく言つてをる。「狂の色合のない偉大なる天才はない」と。

我々の判斷に依れば、是れはかういふ意味にすぎない。活潑なる精神は、腦髓の機關をば、全く無秩序に陷れる程の緊張を之に與へるといふのである。「つちくれの住居に甚だしき感激を與へる」ことは容易である。その住居が詩人の腦髓の如き微妙なる道具である時、之をなすは容易である。僅かなる震動も、時として微妙なる節度計を停止する。又最も立派な音樂家が、狂つてをるヴァイオリンを彈く時には、拙劣なる音樂をなすのである。オフィリアがハムレットに就てかくいつてをるのは誤である。（三・一・一五七）

「けだかい御心も、調子を外れ、
あら〳〵しく振合せた鈴のやうに。」

如何となれば、狂つてをるものは理性でなくして、腦髓であるからである。しかしその結果は同一である。我々は良心が枯れたといふ如く、理性が覆されたともいふのである。

異常なる想像力は、事物をもつと弱い聯想の系を以て結びつけることが出來る。しかし是等のことに依て此力を正當に行使する威嚴を、無視すべきではない。其時此の想像力は事物の秘密に侵入して、宇宙をば、本質的眞理と美を以て改造する。「眞夏の夜の夢」（五—一—四）に於て、シェークスピア自身、模倣すべからざる妙技を振つて、この不可思議な能力の合理的及び不合理的使用を描いた。

「戀人や狂人は、常に腦が煮え返つてゐて、
有りもせん物を造り出す力が善く働くので、
冷かな理性の呑込み得ないやうな事柄を思ひ附く。

瘋癲患者と情人と詩人とは
其心を悉く想像で以て固め上げてゐる。
で、或ひは大地獄にも入りきらん程の夥しい惡魔が出て來たなぞといふ、
それが狂人である。情人とても、物狂ほしさは全く同樣で、
黑んぼ女の面上にすらもヘレンの美を見るのである。
若し夫れ一種微妙の想ひに驅られて、狂ほしく廻轉する詩人の眼は、
今、天を見るかとすれば、地を見、地を見るかとすれば、天を見る。
而して想像が、未だ曾て世に知られざる事物の形を具體化するに隨つて、
詩人の筆は、之に定形あらしめ、空然として虛なる物に
巨處を與へ、名を與ふ。」　（坪內氏譯に依る）

高き合理的方法を以て想像力を用ひる時には、そは五官に依つて摑み得ない眞理を摑む手段となる。理性が最も高き穿鑿をなす時には、想像力は理性の必要なる道具でないとしても、最も緊要なる補助である。數學も、或は道德も、その最も高き眞理をば、想像力無き人に知らしめ得ない。物質的事實の圈內にをる無趣味な勞苦者は、此間の聯絡を發見しないからして、科學を知らないであらう。神は想像によつて理解せらるゝものでなくして、理性によつて理解せらるゝものではあるが、想像は宗敎に最も緊要なる補助である。或人々は、宗敎的になれる程の想像力を持つてをらないとも言へるのである。

詩人が普遍性を表現し得るのは、普遍性が彼の內にあるからに過ぎない。我々は詩人を單に個人として考へてはならない。詩人はその血管の中に鼓動してをる、民族の生命を帶びた、民族の一員である。彼が「人間の靜けくも悲しき音樂」を聽くのは、人間が彼に對して、又、彼の中に語つてをるからである。いつも、最大の詩は、人間のそれよりももつと高い生活を表現する。ダビデとイザヤは、自然と人事の中に神性を見る。是れ彼等の中にある神が、彼等の外にある神を見る事を得せしめるからである。我々は之を呼んで靈感といふ。私はすべての詩人が、靈感をうけてをるとは言はないけれども、靈感の形式は、高いのも、又低いのもあるけれども、若し作家が「すべての人々を照す光明」によつて、悟を與へられなかつたならば、文學の大作は決して可能ではなかつたらうと私は主張する。

神の攝理は、是等の偉大なる力の源泉を、そのまゝに監理しないではおかない。神はバラアムとカヤバとを通じて、彼等の邪惡に反して語りたまふたので、彼等が利己的な、世俗的な言葉のたゞ中に、虛僞が死んでも生きる眞理を突發的に叫んだ

如く、ゲーテは「美しき靈魂の告白」に於て、又モーアは「來れ、汝等、滿足を得ざるものよ」に於て、彼等の意志に反して、豫言せざるを得なくなつてをる。しかし最大の詩人、即ちホーマア、ヴァヂル、ダンテ、ミルトン、ウォーヅワスを通して、我々は屢々神の聲の語るを認めなくてはならない。屢々詩人は恍惚として己を忘れ、彼の言葉と思想とは、自己の及ばざる處に及び、超自然的美の言葉の衣に包まれて、眞理は彼に現はれる。彼は自己を怪むのである。如何となれば、是等のものは彼に依つて作られたものでなくして、彼の爲に作られたものであるからである。こゝに於て彼は詩神を語り、或は神に感謝する。

（五）

是等の思考は、所謂最大の詩人の非人格性を説明してをる。彼等はどんな動機から作をするのであるか。彼等は金錢の報酬の爲に書くのであるか。貧困の壓迫、妻子に對するパンの必要、家族の不幸を救はんとする欲望、——是等のものは、疑もなく、すべての詩人をしてペンを動かさしめた動機であつて、シェークスピアも亦その選に洩れない。又彼等は名譽の爲に書くのであるか。賞讚を欲する心、及び不朽の作を後世に傳へんとする心は、正にダンテが我々に告白してをる如く、詩的藝術をなす原因であり、助であつた。彼等は人類に善をなし、又之を敎へる爲に書くのであるか。然り、是れは藝術品をなす一の動機であつた。そしてミルトンの「失樂園」は「人間に對する神の道を正しとする」ことを求めてをる。

而も如何なる偉大なる詩も、かうした動機が、唯一の、或は主要なる動機として、書かれたことは決してないと私は主張する。是等の動機は原因となり、そのペンを動かすきっかけになるかも知れない。併し作者が、是等の動機以上に高くせらるゝに非らざれば、永久の價値ある詩は産出されない。如何となればこゝに自發性と喜びはなくして、寧ろ外的若くは内的の抑壓があるからである。凡ての大なる詩は、必然の作であると共に、自由の作である。神が創造する如く、詩人は自己の内部にある思想と美の世界を表白する爲のみに、創造するのである。人類の波うつ生命は、詩人の胸中に自意識となる。彼は結果、或は報酬を顧慮せずして、「彼が見且つ聞いたところの事物を語ら」なくてはならない。その題目の中に、自己を忘れる。我々は多くアキリーズの事を知つてをるが、ホーマアを知ること極めて少ない。そして若しシェークスピアが世界の最大の詩人であるならば、この規則は最も彼に適用せらるべきものである。又我々はマクベスに就て多く知つてをるけれども、シェークスピアに就ては知ること少ないのも、不思議ではない。

シェークスピアが文藝復興の兒であるといふテーヌの論辯には、眞理と誤謬との

混雜を認めることができる。すべての偉大なる藝術家は、一は時代の産物である。そしてシェークスピアはかの生命にあふれたる時代に生れあはせて、一切の豐富にして珍貴なるものを聚め、且つ之を表現した。學術の復興は伊太利に始まつてより約一世紀の後、遠き英國に到着した。しかしかく遲れたことは、波の量と力とを增し加へただけであつた。宗教改革は、もと〳〵智能の單なる爆裂であつたものに、倫理的淨化の要素を加へた。そして中世紀の風俗の獰猛は、多少和げられた。アルマダ（無敵艦隊）の敗亡は、スペインの恐怖から英國を自由にした。クイン・オヴ・スコッツの馘首は、内國の敵から英國を自由にした。

時は冒險と發見の時代であつた。世界はその廣さを倍にした。大西洋對岸の寶は、歐羅巴の膝掛の中に注ぎ込まれた。ベルミューダス島はシェークスピアの「倚困つてをるベルムーヂス」となり、異教的の食人種は、カリバンとなつた。近代及び古代の材料は想像の裝ひとなつたと同時に、想像は過去の迷信から解放された。海の女王にして、臣民の熱烈なる忠愛の念を一身に收め得たるエリザベスは、文學の愛好者、文學の促進者であつた。希臘人が彼斯を征服して以來、一國民がこれ程自由と功業の絶頂に達したことは未だ嘗てなかつた。空氣を吸ふことが已に喜びであつた。此詩人の胸の中に在りては、どれ程の望みを抱いても、抱き過ぎるといふことはなかつたのである。

其時、彼の手に用ひらるべきであつた、我々の母語なる英語は、どんな道具であつたか。ノルマン人は、拉典語の威嚴と、響きのよい美を以て、之を豐富にした。サクソン人は、簡單、率直、剛健にして、感傷的な言葉の固い基礎を之に與へた。スペンサアは此言葉の粗剛を和らげて、詩の音樂をなした。シドニーは、英語散文が、如何に律動的で、しかも如何に強くあるかを示した。此時、英語は、規則正しい葬式の歩みをしてをる駑馬ではなくして、いつでも常道を脱せられるやうな美と、烈しい力の合體で、例へば丁度今鞍を置かれたばかりの若駒であつたのである。

我々が今日謂ふ所の言葉の鑄造、及び折々破格寛借として大目に見てをる所のものは、此エリザベス朝詩人の爲した本務であつた。そしてかうした新しい言葉は、造幣局から出たばかりの貨幣の燦爛と美があつた。當時の人々は、特別な美術的形式に對する敏感をもつてをつた。形式と實質とは決して離されなかつたのである。英語はまだピューリタン主義の固さがなかつた。ベーコン卿の言葉を用ひれば、それは「人間の最初の狀態の純潔さの光そのもの」があつた。劇詩は之を道具として用ひ始めたのである。初期の粗野な血腥い悲劇は、少くとも、性格の合理的發展をねらつてをつた劇にとつて代られた。そしてシェークスピア自身がマアローに就て、

「彼の偉大なる詩の勇しき滿ち張れる帆」のことを語り得たのである。

（六）

彼は實に偉大なる時代に生れたが、しかし時代は必ずしも悉く彼を說明する事は出來ない。シェークスピアは生れたもので、作られたものでは無い。敎養は彼に多くの事をしたが、自然は更に彼に多くのことをなした。テーヌは彼を呼んで、「文藝復興の兒」と言つてをるが、テーヌは文藝復興がこんなに偉大でない他の兒を有してをることを忘れてをる。マアローと共に、ベン・ジョンソンはもつと多くの學識と學校敎育とを有してをつた。彼等は文藝復興の兒であつたが、シェークスピアではなかつた。

此佛蘭西の批評家は、人格なるものを餘り信じてをらない。彼の哲學は、人間を周圍の產物であると說く、唯物論的哲學である。かゝる哲學に反對して、シェークスピアは、ホーマアの如く、爭ふべからざる論證となるであらう。こゝに過去を以て說明すべからざる、歷史上の新き力がある。人類は、彼に於てその新き發達期に達してをる。彼の創造せる人物は、特に文藝復興に屬するものでなくして、一般的人間に屬するものである。ベン・ジョンソンは、「彼の作は一時代のものでなくして、

すべての時代の爲である」と宣言した時、彼の天才の本質を認めたのである。

そして是れは我々の偉大なる劇作家の劇が、ベーコン卿の手になるものと言ひ得ない最後の充分なる理由を暗示する。ベーコン卿は文藝復興の兒であつた。彼は批評的、穿鑿的精神を代表してをる。彼の目的は、哲學を理想の高さからひき下して、之に具體的事實の硏究をなさしめるにあつた。彼は確かにルーテルがアリストートルの特長を評して、「罪に定められたる惡をなす異敎徒」と言つた言葉を採用することもできたのである。すべての文學に於て、シェークスピアが人間の性格と生活とを直覺的に摑んだことゝ、他方に於て、ベーコン卿が、周到なる注意を以て、いろんな例を蒐集して、特種のものから一般的なものを歸納したことよりも、方法と精神との偉大なる反對はなからう。アリストートルが敎へ、ベーコンの厭ふた所の「結局原因」はシェークスピアの生命そのものであつた。ベーラムのフランシスが「眞夏の夜の夢」或は「テムペスト」を書いたと想像することは、荷馬車馬が、天馬の如く天に登ると想像することである。

（七）

かゝる天才の敎育は敎育者にとつては自由敎育をとるより外なかつたに違ひない。多樣の質問を胸に懷いてをる、かゝる活動的な、憧憬的な人間は、神殿の學者

等には甚き迷惑であつたに違ひない。彼はストラットフォード公立學校で、多く正式の勉強をしたといふことは確實でない。しかし彼が折々拉典語の詩を挿入し、殊に新き語源的の意味で、拉典語から出た言葉を使用してをることを見ると、彼が拉典語を實際的に拾ひ讀みしたことは明かである。彼は拉典語よりも、希臘語を多く知らなかつたと言はれてをるが、「リチャード三世」の一節にある長い問答を說明せんとするには、是等の短文が、ユーリピデスを讀んで思ひついたものか、それとも學校で朗讀を聽いたものであるとでも想像しなくては、とても解せられないことである。

「アントヱイ・エンド・クレオペートラ、」若くは「トロイラス・エンド・クレシイダ」等の劇を見ると、シェークスピアは、希臘、羅馬時代の精神、及び天才を、呑み込んでをつたことがわかる。彼はユリッセスを描くに、ホーマアがユリッセスを多くの詐欺的の人間と言つてをる言葉を捕へて、ホーマアといへども企て及ばなかつたであらうと思はれる、完全さと、矛盾なき調子を有する言葉を以て、ユリッセスを暴露してをる。

學校に行つたとか、行かなかつたとかは別として、シェークスピアは當時のすべての學藝を所有してをつたであらう。又所有してをつたのである。彼はいろんな時に、法律家、醫者及び軍人であつたに違ひないといふことを證明する、多くの論文があるけれども、恐らく彼はその何者でもなかつたであらう。彼が「シンビリーン」（一・一四三）に於て、一人の紳士をしてポシューマスに就てかく言はしめてをる時、彼自身の心的發達の物語を告げてをると信ずることは、道理ではなからうか。

「王は
　彼が生涯に學び得る
　すべての學藝を彼に提供し、彼はそれを
　空氣を吸ふやうに、すぐさま、吸ひこみ、
　青春にして既に收穫時の如き博學を得た。」

（八）

彼は一見亂暴な放蕩者であつたと言はれてをる事柄も、同様に解釋することが出來る。かうしたことを暗示するものがあるのは、寧ろ、彼がものを選ばないで食べる様な、知識欲をもつてをつたしるしである。すべての珍い經驗を喜ぶ詩人的の心を以て、彼は人生の中に躍り込んだが、それがために、彼は自己を振り捨てはしなかつた。彼は快樂に對して敏感ではあつたけれども、それと同時に、正しき判斷をも持つてをつた。彼は此理性をもつてをつたから、彼を曳きずり倒したであらうと

思はれる誘惑と惡友等の、手の及ばないところに、彼の精神をしつかりとしておくことが出來た。海岸の砂のやうな、心の大きさを以て、彼は一切を制御し得たが、何物にも制御されなかつた。

グリーンは飲んで飲み倒れ、マアローは口論の中に死んだが、シェークスピアは決してそんなことをしなかつた。彼には、野卑なものに反抗する敏感な趣味があつた。まだ枯れない良心が、善惡を區別した。「ヴィーナス・エンド・アドニス」はシェークスピアの青年期の肉欲に溺れたことを證明するものではない。是れスウィンバンの「ラウス・ベネリス」が、彼の放蕩者たることを證明しないと同じである。

罪惡に對するかうした行動は、冒險的で、又罪惡的ではあるが、而かも我々は率直にかく信ずる事が出來る。この罪惡は、學校時代の酒宴の歌の如く、實際的よりも、寧ろ理想的で、實行といふよりも、寧ろ考だけの事である。是は知的能力が戯をする問題を選び損ねたのである。眞の罪惡は、罪惡の醜惡そのものに甚しく沒頭するから、自己觀察をしたり、詩的であることはできない。彼を餘りに酷に批難する人々に對して、彼はウォルウィックがプリンス・ハルの亂暴な仲間を愛したことを、寛大にも許してをる言葉を用ひる事が出來る。（「ヘンリ四世」、第二部、四・四・六七）

「陛下、それはお案じ過しでございます。
王子が彼等をお友達となさるのは、
譬へば、珍しい言葉の御研究も同樣で、甚しい下等な、
いかゞはしい言葉も、一應はお學びにならざるを得ませんのです。
が一たび御承知にさへなれば、あゝ卑い言葉だとお會得になれば、
それでもう御用はないのでございませう。則ち、下等な言葉を
お覺えになつて、お棄てになります如く、
王子は其時機の熟するを俟つて、
あのお附きの者共を御放逐遊ばすでせう。で、彼等は、
見本や尺度のやうに、殿下が人間の性行を考量なされる御用だけに、
お記憶に存在して、以前の御不利が、
後の御利益とも相成りませう。」　（坪内氏譯に依る）

彼の放蕩な青年時代が全き絶望を免かれたのは、不義の戀の失望と、親友の裏切と、彼の父と息子の死によるといふ、も一つの理論もできる。我々は猶豫なく此事實を認容するけれども、この事實から下される推測を棄てる。此推測に就ては、ただこれだけ言へば澤山である、シェークスピアの天才といへども、それが文學的、劇的の功業の絶頂へ不斷に進んで行くには、長年月の輕率放蕩によりて出來たとは

思はれないといふことである。天才は働くべき材料を要する。その材料は勞力によつて集めなくてはならない。失望と、裏切と、死とは、シェークスピアに多くの敎訓を與へた。しかしながら是等のものは決して泥醉を勤勉となし、情欲を智慧としなかつた。

(八)

ダブリン大學の敎授ダウデン氏は、以前のすべての著者に優つて、此詩人の生涯と作品との、合理的及び連絡ある記述をした。千六百年はシェークスピアの生產的活動の中心點とされてをる。千六百年に先んずる十年は、彼の天才が發芽して、成熟するのを見た時期である。千六百年後の十年は、彼の最も偉大なる勝利の時期である。故に一五九〇年と一六一〇年との二十年間は、シェークスピアの劇作の全體を含むものである。しかしこの二十年間の各十年は、之を更に區分して、五年づゝにすることが出來る。そして此五年期は、大體ではあるが、しかし實質的に、相互から明確に區別することが出來る。ダウデン敎授は此四つの小期を稱してかく言つてをる。(一)「仕事場に於て、」(二)「世の中にて、」(三)「淵から、」(四)「絶頂に於て」と。

暫く此順序を逐うて、シェークスピアの天才の發達を理解する爲に與へられる、すべての助力を借りよう。我々は此詩人が一足飛びに彼の卓越に達しなかつたことを見る。普遍性は一躍して達し得られたものではなかつた。最初に、年期奉公の時期があつた。その時期には、想像が騷ぎまはつたのである。「ロメオ」と「タイタニア」に於て、美なるものは過剩である。すべてが規則正しく、地口や駄洒落が多く、絶える間がない。

シェークスピアは大體に於て他人の作を改作してをつた。「ヘンリ六世」の三分の一、及び「リチャード三世」は、彼以前の作品を採用して、之を改作したものである。かうした作の原作者は、彼と一緒に、脚本の作成をやつてをつたが、彼等は羨ましげに、彼をば「我々の羽根を以て美しくかざつた成り上りの鴉」と言つたものである。併し是等の劇作者等が、今尙、彼等の名を殘してをるのは、シェークスピアが彼等の中にふき込んだ息の爲にすぎない。彼が彼等から得た材料を用ひた時、彼はそれを變形して、原作者も殆ど之を認め得ない程にしたのである。是等の實驗の時代に於ても、彼は彼の作品の中に、力と、變化と、眞理と、美とを注ぎ入れた。そして是等のものは、劇文學に於て、全然新奇なものであつた。

「仕事場に於ける」五年の後「世の中に於ける」五年間が來た。彼は他人との共作がなくともすまされるやうになつて、全然獨立の作をなし始めた。商賣として作を

始めた彼は、此の商賣が利益になることを見出した。そして彼の作品が愈〻獨創的になればなる程、愈〻金が儲かつた。當時傾きかけてをつた家運は復興した。借金の爲に告訴されて、領地を失つた彼の父ジョン・シェークスピアは、一五九六年、紋章をつける自由を請願した。そして一五九七年、詩人は家族の家としてストラットフォードにニュープレイスを買つた。一五九八年、フランシス・メイヤスは「智慧の寶」の中に、詩人の確立せる名聲を立證し、彼を英國詩人及び劇作家中の最大なるものとし、同時に希臘羅馬に於ける悲劇、或は喜劇の、最も偉大なる作家に匹敵すると言つてをる。

成功は彼を勵まして、愈〻大膽なる努力をなさしめた。彼は劇詩の傳統的制限を振り捨てた。單調一の節奏を有する、一行毎に切れる詩をやめて、屢〻ウィーク・エンディングスのある、次の行まで句の切れない節を作るやうになつて、句讀の切方が驚くべき程多樣になつてをる。「ヘンリ五世」の序曲は、シェークスピアが彼の詩に挿入したる新しき自由と無限の力とを説明してをる。合唱が始まる。

O! for a Muse of fire, that would ascend
The brightest heaven of invention;
A kingdom for a stage, princes to act,
And monarchs to be hold the swelling scene!
Then should the warlike Harry, like himself,
Assume the port of Mars; and at his heels,
Leash'd in like hounds, should famine, sword, and fire
Crouch for employment. But pardon, gentles all,
The flat unraisèd spirits that hath dar'd
On this unworthy scaffold to bring forth
So great an object: can this cockpit hold
The vasty fields of France? or may we cram
within this wooden O the very casques
That did affright the air at Agincourt?

「おゝ！　最も高き創造の天を
登らんとする、焔の詩神！
舞臺を王國とし、王子と王を、
活躍せる場面に躍らせよ。
かくて好戰きのハリは、にあはしく、

マースの態度をとらなくてはならぬ。そして彼の踵に接して、
つながるゝ獵犬の如く、飢饉と、劍と、火は、
うづくまつて使用を俟たねばならぬ。けれど、ゆるしたまへ、觀客諸賢、
ふさはしからぬ此舞臺に、
かゝる大問題を演ぜんとする、
平凡、力なき靈を。此闘鷄塲が、
佛蘭西の大戰塲を占め得るか。或は又
此木造のO形の中に、エーヂンクールの空氣をば、
驚駭せしめた兜を詰め得るか。」　（譯者に依る）

此壯嚴なる一節は、啻にシェークスピアが劇作に與へた、新き壯嚴と自由とを示すばかりでない。同様に、彼の第二期の寫實的性質を示すものである。宛も彼はかく獨語をしてをるやうである。「私は地口や駄洒落をやめた。私は眞實の生活を取扱ひたい」と。「世の中に於ける」五年間は、「ヴェニスの商人」及び史劇の連續によつて代表される。此八個の史劇は、互ひに一貫せる連絡を以て連續してをる。その中の一つも、それ自身、絶對的に完全でない事實から判斷して、シェークスピアは、一大英雄詩の部分を作るつもりであつたと推測することが出來る。そのうちに彼は恥辱と名譽とを有する英國の歴史を、人々の目の前に活躍せしめんとしたのである。

史劇は王の鏡であると言はれてをる。彼等は君主の模範であるべきである。しかし模範なる君主はシェークスピアの「ヘンリ四世」、若くは「ヘンリ五世」の威嚴と力に應じ得る、極めて王らしき王でなくてはならぬ。君主のローマンティックな弱點に對する如何なる警告も、「リチャード二世」を讀む時程に、感激的なものはない。又、信心深い弱點に對する如何なる警告も、「ヘンリ六世」の表現程に力強いものはない。著しき事は、王の弱點を描ける劇が、此詩人の初期に屬し、王の偉大と力とを描ける劇は、その成熟期に屬するといふことである。彼は、かくして、王の氣質、及び精神に深くはいりこんだので、俳優の仕事を非常に困難にした程である。是等の役割は、君主にあらざれば適切に演ぜられ得ないのである。或はシェークスピアの普遍性に入ることを得る程の、想像力を有する人々に非れば、演ぜられ得ないのである。

（九）

今や、千六百年と、彼の人格の成熟せる確信と共に、詩人は彼の思想を内へ向けて、彼をして深く人生の大問題を瞑想せしめた轉變と悲とが來た。ソネットはこの

暴風期のものである。シェークスピアの父と、獨り息子は死んでしまつた。親友の裏切は髓に至るまで彼を傷けた。快活に青年時代のすべての失望に顔をむけた、輕輕した精神は、陰氣に人生を見る眼となつた。悲、怒、恐怖をなす人間の感情の能力は、未だ嘗て無かつたやうに、彼の前に開かれた。此第三期に屬する五年間は、「淵より」といふ言葉によつて適切に表はされてをる。千六百年から千六百五年までは、文學史に於ける最も多產なる五年間と考へなくてはならない。如何となれば此五年間に產出されたものが、「アントニイ・エンド・クレオペートラ」「ハムレット」「リア」「マクベス」「オセロ」及び「コライオレーナス」であるからである。是れ即ち世界の六大悲劇である。是等の作は、最も偉大なる情熱の、過度の働を示してをる。「アントニイ・エンド・クレオペートラ」に於て、我々の見る所のものは、高貴なる心と心情とをひきずり倒す、肉欲的快樂である。「マクベス」に於て見る所のものは、野心である。「オセロ」に於ては、嫉妬心。「コライオレーナス」に於ては、傲慢である。「リア」が我々に示す所のものは、不孝のために狂氣になつた、人間の靈である。「ハムレット」は、義務の前に立てる、理想家の動搖と、その結果永久に機會を失ふ事を、人格化せるものである。

しかし、是等の人間の情熱と弱點の體現はマアローとベン・ジョンソンの、影のやうな抽象を去ること、實に遠い。彼等の人物は、情熱が單に外觀の衣を裝へる案山子である。彼等は自動人形の如く、その定められたる行動をなすけれども、眞の生命は無いのである。シェークスピアの人物は、非常な活躍をしてをるから、宛も生ける人間の如く、彼等の動機と活動とを我々は論ずるのである。我々は人間の心情が、相爭ふ感情によつて、粉碎されてをるのを見る。而も色彩は屢々陰氣ではあるけれども、深く之を回想すれば、是等の人物に於て、自然そのものが言葉を出してをることを確信せしめられるのである。

シェークスピアの多產なる活動の第二期に屬する喜劇もあるが、是等のものは、第二期に屬するものゝ如く、輕い冗談の多いものではない。最早「ウィンザルの嬉しき妻」「無駄骨折」「御意のまゝ」といつたやうなものはない。「以尺報尺」「終のいいものは皆いゝ」「トロイラス・エンド・クリシイダ」は此期に出來たものである。是等の喜劇は皮肉で、辛辣である。これは誤れる判斷と裏切とを取扱つてをる。

第三期から、第四期に移ることは、愉快である。千六百五年から千六百十年までの五年間は、恢復せる沈靜、寛容、和解の時期である。此時期は、彼の生涯の、穩かなる印度の夏である。加害者が正當の取扱を受け、罪を犯せるものが悔い、晴やかな心廣き慈悲の物語に滿てる「シンビリーン」「冬の物語」「テムペスト」等の

作は、後年期の産物である。シェークスピアの木の葉は未だ凋み始めなかつた。まだ色あせて黄色にもならなかつた。彼の死んだ時は、五十二歳に過ぎなかつたところを見ると　彼はやつと成熟せる壯年期になつたに過ぎなかつた。

彼はかくして相應の資産を得て、それを樂しむ爲に退隱した。彼はストラットフォードの第一流の市民であつた。若し彼の家族と仲たがひがあつたとしても、その時はもうそれが收まつたのである。劇作家及び詩人としての彼の傑出せることは、すべての人々の認める所であつた。次代の淺薄なる批評は、まだ彼の名聲を暗くし始めなかつた。彼は今や書くことが少くなつたやうに思はれる。そして彼が書いたところのものは、外部的要求に適合しやうとするよりも、寧ろ、内的衝動を滿足させる爲に書いたのである。「テムペスト」(五・一・五〇)のプロスペロは、此成熟せる收穫期に於ける、彼自身を描いたものであると思はれる。プロスペロの最後の言葉に於て、シェークスピア自身が劇作に對する別れの言葉がある。

「しかしながら、此猛しい妖術を
予は今日かぎり、棄てようと思ふ。で、おのしらに或神聖な音樂を
奏せしめた後に……それは彼等を正氣に復らせるための呪法なのぢやが……
予は此杖を折り、それを幾十丈も下の地に埋め、
それから予の此書を測量鈎の曾て達いたこともない程の
深い海底へ沈めようと思ふ。……」　(坪内氏に依る)

(十)

彼は充分に彼自身の天才を認めたか。彼は自分の劇を訂正し、或は之を出版する準備をする爲に、骨折つたやうな所はない。彼の二人の娘、ジュディスとスザンナに、色んな財産を讓る遺言狀の中に、劇に興味がある事を述べてをるところもなし、又之を編纂して出版しやうといふ用意もなかつたのである。是等の劇の保存された事は、シェークスピアの同輩なる俳優のお蔭である。彼等の配慮が無かつたならば、劇は亡びてしまつたかもしれない。

彼の不注意は當時の特性であつたといふ事は正しくない。如何となれば、ベン・ジョンソンは果しなき時間を費して、その著作を訂正し印刷したからである。勿論シェークスピアの遺言は、彼の心の一部分だけを表白したといふことはあり得べき事であるが、彼が遺言狀を作つた時、間もなく死ぬとは思はなかつたせいかもしれない。而も尙彼が自分の財産の他の部分を處理しながら、自分の作品に就て、一顧も與へなかつた理由は、一つの秘密である。彼は尙多くの年月を費して、訂正しようと思つたのかもしれない。實際シェークスピアの死後、間もなく、火災にあつて

失はれたるグローブ・セアタアの所有にかゝる寫本は、すでに始められたる訂正の跡があるつたかも知れない。

しかし以上述べた事は臆説である。私は既に願はしき説明と私に思はれるところのものを暗示した。そは私の特別の問題に關聯してをる。最も偉大なる詩人は非人格的である。彼等はバプテスマのヨハネの如く、自ら神の聲であると考へて、自分等の作を神に任せる。シェークスピアは特に自己を忘れてゐたやうに思はれる。彼の時代から我々に傳はつた、最も特色ある形容詞は、ベン・ジョンソンが彼に適用した言葉で、ジョンソンは彼を呼んで、「温厚なるシェークスピア」と言つた。生れ乍らに羞恥心多く、且つ感じ易かつた彼は、非常に高い理想を抱いてをるので、高貴なる功業をなした後、それらのものから離れたいと欲するだけである。賞讃はいやになる。如何となれば彼は餘りに自己の缺點を意識してをるので、それに耳を傾けることは出來ないからである。若し彼の歌の中に、何等かの價値があるとすれば、後世の人々が之を發見し、彼の特別なる配慮に依らずして、之を賞讃するであらう。

シェークスピアが自ら誇つたところのものは、劇ではなくして、「リュークリズ」や「ソネット」の如き韻文であつたことを發見する時、此見解の眞なることを信ぜざるを得ない。劇詩は全く眞の詩ではない。群衆を喜ばせる爲の單なる間に合せであるといふ感情を、彼は全然脱却しなかつた。劇作は演出と密接な關係がある。彼が之を始めたのは、職業としてゞあつたが、此職業はあまり名譽のある仕事ではなかつた。それで此職業を全然脱してしまつた時、彼は安堵と贅澤とを感じたのである。彼は「ソネット」(一一一)に於て、俳優の職業が彼に惡影響を與へたことを悲んでをる。

「おゝ、私のために、運命と共に責めよ、
私の邪まな行爲の罪深き女神を。
そは公の風習がはぐくむ公の收入よりも、
よきものを私の生にそなへなかつた。
その結果私の名は燒印をうけ、
そして、ために、殆ど私の性情は染屋の手の如く、
その影響感化に染められてゐる。」

彼は彼の劇が永久の生命をもつてをるといふことを、一度も豫言してをらない。「ソネット」(一〇七)に於てのみ次の如き言葉がある。

「此の最もかぐはしき時の滴を以て、
愛するものは爽かに見え、死は私に屈從する。

死に拘らず、私は此のあはれな韻文に生きるからだ。
死は愚かなる言葉なき種族を侮辱するけれど。
　そして汝は之に於て汝の記念碑を見出すだらう、
　暴君の冠と眞鍮の墓が滅びる時に。」

私の信じなくてはならないことは、劇に於ける多くの明かな缺點は野卑なる民衆の趣味に讓歩した點である。シェークスピア以前の劇は、人情の野卑な本能に訴へたものである。殘酷な場台が演ぜられ、猥褻と獰猛とが並んで行はれ、近代の小說家及び脚本家が再び文學の中に入れやうと努めてをる、戰慄的感情が、エリザベス以前の劇の試金石であつた。

驚くべき仕上げと美とを有する「ヴィーナス・エンド・アドニス」を書いた同じ手が、好んで「タイタス・アンドロニカス」の殘酷を書いたであらうとは考へられない。併し「タイタス」は大方シェークスピアの最初の劇であらう。——兎に角、彼は此劇を書く事に關係した。人を怯かし、又恐れしめるやうなものが、經驗と智慧とが進むに從つて、段々少なくなつたことは、彼が理想的標準に向つて不斷に進步した證據である。

彼の第三期の作「キング・リア」に於てさへも、コンウォールは見物人の目のまへで、グロスター伯の眼を刳りとる場面を作つてをるけれども、是れはシェークスピア劇に於ける殘酷の唯一の例外である。彼は、大體に於て、眞の藝術の中で、肉欲或は動物的精神に訴へる事は、全然關係無きことを認めてをる。その藝術的全生涯を通じて、彼は、人間の最も深き、最も高貴な、最も永久なる情緒を對象とする詩的判斷の普遍性に向つて進步しつゝある。シェークスピアは野蠻なる時代に向つて、其の世相を示すことを以て出發點とし、而も彼の時代に超越し、彼の時代に向つて、宇宙の眞髓に橫はるところの理想的眞理と美とを示すことを以て、終極としてをる。

(十一)

私は普遍性なる語をとつて、シェークスピアの秘密を開く鍵とした。謂ふ所の普遍性なるものは、すべての場所、及び時代に於て、彼がよく流行兒となり、或は評判がいゝ事を言ふのではない。——そは詩人に依らずして、彼を讀む人々の敎育と見識とによるかも知れない。謂ふ所の普遍性なるものは、詩人自身の所有する、或るものを言ふのである。即ち個人的或は局部的でないもので、すべての場所に於ける人間性に、共通なる要素を把握せることである。シェークスピアの想像が、比類なく他に卓越してをる三個のものがある。第一、性格の創造者なること。第二、比

喩の創造者なること、第三、措辭の創造者なることで、彼は是等の點に於て、すべての人間の最大なるものである。此三つの事に於て、彼が自由に天下に馳驅してをることは、到底異論を挿む事の出來ない點である。如何となれば此のすべての塲合に於て、彼の想像は理性と眞理の法則の下に、比ひなき平易と自發性とをもつて活動してをるからである。

シェークスピアの性格創造に於ける普遍的要素を理解する爲には、前期の作と後期の作とを取つて、そこに組織のかうした事實を觀察することが利益である。是れは普通の讀者の漠然と理解してをるもので、而も是れは彼の力の主要なる源であるからである。私は今こゝに「リチャード三世」と「マクベス」とをとる。如何となれば彼等は兩者共に、歷史的及び理想的劇を代表せるものであるから。而も又私はこゝにモルトンの暗示に從つて、その賞讃すべき著書「劇作家としてのシェークスピア」に於て、彼の言つてをる事に注意を惹きたいと思ふ爲である。

「リチャード三世」は最も評判のいゝ劇であつたやうである。この劇は必ず大向ふをうならせる。或者は是れを此劇の甚だしき猛烈さにあると考へる。ローウェルの如き偉大なる批評家は、此作がシェークスピアの手になつたものである事を疑つてをる。如何となれば詩的表現の微妙、ユーモア、及び能辯に缺けてをるからである。是等の風格は、「リチャード三世」に於て、最もよくあらはれてゐないことを承認しなくてはならない。しかし筋は、風格と同樣に、偉大の標準である事を記憶したい。「リチャード三世」の筋は偉大なる價値を有してをる。故に我々は此劇をシェークスピア以外の手になつたものだとは考へることが出來ない。同時に、我々は、此中に曙の光のみを見るのである。それが子午線まで登つた光は、「マクベス」の如き悲劇に於て見出される。此二つの劇の比較は、謂ふ所の普遍性なるものを說明し、同時に、此普遍性に對する彼の進步を示すものである。

「リチャード三世」はシェークスピアの完全にして理想的なる惡黨である。リチャードはイヤゴーのやうな口實をもつてゐない。即ちイヤゴーの口實としてをる所は、他の者が彼に誠實でなかつたといふにある。リチャードは故意に惡事に沒頭してをる。そは彼が不具に拘らず、彼の力を示し得る唯一の方法であるからである。彼は惡黨である。意識せる、又、自ら公言せる惡黨である。劇は性格の發展を示さない。唯すでに作られてをる性格を漸次暴露してゆくだけである。

物語は何等複雜なところは無い。劇中の如何なる他の人物も、特別の興味を起さないし、又、此一人の主人公から注意をそらすものもない。そしてリチャードは惡事だけの主人公である。彼の惡意の强さ、目的を遂行するに用ひる、殆ど超自然的

の熟練は、我々がミルトンのサタンによつて心を奪はれる如く、我々の心を奪ふ。或者は之を想像して、ミルトンはシェークスピアの此人物から、かの「亡びたる天使長」の特色の二三をとつたと言はれるのも、尤もである。しかしリチャードは、ミルトンのサタンと共に、ゲーテのメフィストフェレスのもつてをる要素をもつてをる。彼は僞善的な、傲慢な、惡魔であると共に、嘲笑的な、皮肉な、滑稽な惡魔である。

彼は男子を制御することを誇りとしてをるが、殊に婦人を欺くことを誇りとしてをる。厚顏無耻にも、彼は皇太子エドワルドの寡婦レディ・アンの機嫌をとつて、彼女を自分のものとする。そして彼は自らエドワルドをテュークスベリの戰塲に於て刺し殺したのである。そして彼はヘンリ六世の棺桶の側で、彼女を誘惑するのである。ヘンリ六世はエドワルドの父で、リチャードは彼を倫敦塔に於て虐殺したのである。彼の勝利は、恐い一の魔術とも思はれるが、リチャードは之に對して氣味よげに笑ふのである。何等の悔恨の情も、彼の心を亂さない。良心は眠らされてをる。惡は彼の利益となる。彼は罪を喜ぶのである。彼は罪惡の藝術家である。彼はかく言つてをる。(「ヘンリ六世」、第三部、三・二・一六五)

「此世は私に何のよろこびも與へない、
自分よりもいゝ人間であるやうなものを
命令し、妨害し、抑壓する外には。」

殆ど最後まで、彼の道は不斷の成功と思はれる。彼の惡魔的な欺瞞と、殺人をなす殘酷の前に、すべての妨害は退くのである。「後悔或は恐れなしに」。彼は「流血と、虐殺との中を通つて王位に赴く。」クラレンスとリヴァース、グレーとウォーン、ヘスティングスとバキンガムは殺される。クイン・アンは毒殺される。若き王子等は塔の中で絞殺される。若し復讐する正義があるといふ、何等かの前兆が無いならば、是等の事は甚だしく道念を傷けるであらう。詩人は是等の前兆をあまりに密接にリチャードに結びつけ得なかつたのは、リチャードの抵抗するものなき意志と、妨げる者なき惡の劇的表現が、人々の想像力を摑む力を失ふ事を心配したからである。長い間、復讐の神は小人物の塲合にのみ現はれる。クラレンスとリヴァース、グレーとヴォーン、ヘスチングスとバキンガム等は、リチャードの手中に入りこんで、彼の罪惡を唆かしたものであるが、是等のものは悉くひきつゞいて、彼等の運命の中に、彼等の過去の不義と野心の正當なる報酬を認める。彼等の死は嵐を示す遠雷の呟である。

終に嵐が起る。リチャードの成功せる惡は、彼に對して遙かな絶大なる破滅の準

備となる。眠を覺してをる時に、轡をはめられてをつた良心は、今や睡眠中に彼の心を食ふのである。彼が殺した人々の幽靈は、敗亡の豫言を以て、彼を苦めようとして立ち上つた後、戰爭の時に臨んで、ひどく彼の魂を苦める。彼は惡戰苦闘の後、全く屈服する。彼は恐怖の惱みに惱んで、一頭の馬の爲に自分の王國を與へたいと思ふのである。併し逃亡は彼を救ふ事が出來ない。彼の犯罪、及びヨーク家の犯罪は、その應報を受ける。此殘虐なる卑人の死んだ額から、王冠はもぎ取られて、ランカスタの代表者なるリッチモンドの額を飾る。そして再びヘンリ七世として王位に就いた彼の治世の下に、堅き平和が來る。復讐の神は遂に來た。神々の挽き臼は、碎くことおそいけれども、その碎き方は極めて細かく、「リチャード三世」は神の刑罰的正義に對する說敎の、最も感銘深きものゝ一となるであらう。

（十二）

こゝに劇的動作の統一、思想の深さ、運動の敏速、表現の火の如き力がある。是れ皆シェークスピアの獨特のもので、而も「リチャード三世」の我々に示すところは、彼がまだ彼の藝術を充分に驅使してをらないことである。「マクベス」悲劇の研究は、此兩作の距離の如何に大なるかを敎へるであらう。「マクベス」の廣さに比べると、「リチャード」は狹い。「リチャード」は簡單であるが、「マクベス」は複雜である。前者に於ては、リチャード以外に人物といふものがゐないのに、後者には、ダンカン、マグダフ及びマクベス夫人等の人物がをつて、それが、各ゝ性格の差別を書きわけられて、各個皆マクベス自身の如き勢力あるものとして、獨特の役目を演じてをる。「リチャード」は、初めから、充分に成長したる怪物である。我々は、初めから、彼が將來如何なるものとなるかを知る。彼自らそれを我々に告げてをるからである。しかし我々は「マクベス」に於て、惡がその最初の暗示から、終局的絕對的の自然支配に至るまでの、恐しい發達を見るのである。情欲の內的活動、憐愍の抑壓、悔恨の地獄の火、如何なる文學に於ても、他に此の如く描寫せられてをるものはない。

先きの劇に於ては詩人は言はゞ一つの樂器を彈ずるのである。その範圍種類は極めて小さい。後の劇に於て、彼はオーケストラを指揮し、問題を廣げ、一つの樂旨を他の樂旨に錯綜せしめ、情緒表白の多くの形式を組織して、一の偉大なる調とすることを學んだ。我々は此二つの劇に於て、同一のシェークスピアを認めるが、「リチャード三世」に於て、彼は村の尖塔から人情を見下してをるやうに思はれるのに、「マクベス」に於ては、山の絕頂に立つて、彼の前に開展せられてをる、すべての人間社會を見るのである。

「マクベス」に於ける復讐の神と「リチャード」のそれとを比較したい。惡の超自然的代理者である魔女は、人間の惡の決斷を暗示し得るが、之を起すことは出來ない。マクベスはバンコーから警告される。(一・三・一二二)

「が、こりや不思議なことだ。
どうかすると、惡魔が、人間を邪道へ誘はうとして、
わざと眞實の事を告げることがある。
一寸した驗を見せておいて、
重大な事でおとしいれようために。」(坪内氏譯に依る)

併し此警告は等閑に附せられ、誘惑を育て、主義を破つて、終に自由意志をサタンに委せ、かくして永久に力を增して行く墮落と、自己破滅の道をとる。そして罪は罪の發見者、裁判官及び拷問執行人となる。

マクベスは王位に即くまで、少しも人の疑を受けない。彼の罪は成功したやうに思はれる。しかし罪は罪を生む。彼は最初の刑罰から逃れる爲に、次の罪を犯すのである。そはシラが言つた如くである。

「惡行は新き惡行の種子となる、
是れ惡行の罰。」

そしてバンコーを殺害する第二の罪は、ダンカンを殺した最初の罪の結果である。マクベスの幸運は、劇の全半を通じて高まつて行くが、その後、引き續き下り坂となつて、遂に不幸な最後を遂げる。甚しき野心はあまりに飛びすぎたのである。最後の運命を逃れやうとする努力は、却て自己の悲運を實際にする手段とされる。惡人は自己の罪の糸で縛られる。初め彼を惡に誘つた惡の靈は、恐しき皮肉を以て、彼の禍を嘲弄し、彼は絶望の極、かく叫ぶのである。(五・八・一九)

「あの嘘つきの惡魔どもめ、兩義の言葉で人を欺き、
耳へは約束を守るらしく聞かせておいて、肝腎の望を失はせをる、
惡魔どもめ、もう信ずることではないぞ。」(坪内氏譯に依る)

「マクベス」に於けるこの罪の僞瞞と皮肉とは、リチャードが、落着いて、公然と、罪惡を擁護するよりも、實に深くして且つ悲劇的である。こゝに於ても、その描寫は極めて多様である。マクベスとマクベス夫人とは「リチャード」に類似なき對比を示してをる。こゝに、野心と、殺人と、悔恨とは、二つの違つた性情の中に働いてをる。マクベスは、衝動的、實際的な活動の人であり、夫人は自分の夫の目的に身を任せて、自ら彼にその行爲を爲さしめやうとして、彼に元氣をつける爲に、自ら女性たることをやめる、思想と意志の婦人である。マクベスは魔女に對して迷信

を抱き、バンコーの幽靈を恐れてをる。夫人はかゝる迷信と恐怖の念を自ら消して、之を逃れ、超自然的現象の中に、大望と、悔の感情の反射のみを見るのである。

此活動の人は逡巡してをれない。眞逆樣に新き罪惡に突入し、その結果、自己暴露に突入する。男は力が無くなつてをるのに、女は待ち、隱し、計畫し得る。しかし神經の緊張は餘りに甚しい。復讐の神は狂氣となつて彼に追ひつく。そして彼女の狂氣は長き告白である。夢遊病者となつたマクベス夫人は、あへぎながらかく言ふ。「まだこゝに血の臭がある。アラビアのすべての香料も、此小さい手を香よくしないだらう。」そして狂氣は自殺に終る。

しかしマクベスの復讐の神は、恍惚狀態になつてくる。彼は、彼の敵が、彼を亡ぼす爲に集つてをる時でも、盲目に神託を信ずる。彼は叫んでかく言ふ。

（五・三・三二）

「此肉が骨から削り取られてしまふまでは戰ふぞ……。

もつと騎兵を出せ。國內を巡察させろ。

臆病風を吹かす奴は絞罪にしろ。甲冑(よろひ)をよこせ。」（坪內氏譯に依る）

そして此超自然的の誘惑者の虛僞なることが暴露される時、彼は死物狂ひになつて戰場に突進する。彼は討死するが、彼の死は眞の自殺であつて、彼の自殺は眞の告白である。

（十三）

是等の劇を讀む者は、シェークスピアが最大なる倫理的敎師の一人なることを認めないではをられないであらう。是等の悲劇に就て眞なることは、彼の作全般に就ても亦眞である。そは人間の最も深き心情の中に共鳴を起す。しかし是は詩人が、道德的敎師にならうと、固定した目的をもつてをつたからではない。すべてかうした事は偶然である。彼の目的は、たゞ人生を描き、人間の眞相を示し、愛情と憎惡と、希望と恐怖とを有する人情を示さんが爲である。こゝを以てシェークスピアが、人間の道德的性情の中に、良心の最も高き地位を有することを說明せる點は、愈〻力强いものとなるのである。

シェークスピアの宗敎及び敎義を取扱へる方法にも、同一の事が適用される。彼は敎義を說明するつもりは無かつた。彼は羅馬敎徒であつたか、プロテスタントであつたかは、何人も確言する事は出來ない。せめて我々の言ひ得るだけの事を言へば、彼はピューリタン主義を嫌うて、一二回之をからかつてをる。ホーマアとヴァージル、ダンテとミルトンは、各自天國と地獄とを有し、皆躊躇するところなく、見えざる世界を描いた。しかしシェークスピアには天國も地獄もない。彼は此

現世を取扱つてをるだけである。彼の幽靈、魔女でさへも、死後の生活に就ては何事も語らない。——彼等は牢屋の秘密を告げることを禁ぜられてをる。それで彼等は「一言葉でも言つたならば、魂を震はせる物語を話せる」（ハムレット、一・五・一三）ことを暗示するだけである。彼は世俗の詩人で、宗教の詩人ではない。現世の詩人で、靈界の詩人ではない。

茲に彼の普遍性の限度がある。シェーラーが言つた如く、「見えざる世界の中にありて、シェークスピアの幻は力がない。」しかし彼はそれにも拘らず、此人生の多くの人事關係を、最も健全に、且つ公平に理解した。そして悔恨と應報の倫理的事實に對する彼の表明の如く、基督教眞理に對する彼の證明は、それが不用意に與へられてをるが故に、愈々價値がある。此證明は果して何であるか。そして我々の信仰の如何なる教義がそれから確證を得るかを研究したい。此部分を取扱ふに當つて、多少私はビショプ・ウォーヅワスの「シェークスピアと聖書」といふ書籍に參照されてゐることを多少利用する。

シェークスピアは神學を教へると公言してをらないけれども、それは彼が神學をもたないからではない。又神學は人間に不可能なものと考へた爲でもない。彼は不可思議論者ではない。彼は我々の神に關する知識、及び神と宇宙との關係の知識に制限ある事を述べてをると同時に、その眞實と價値とを主張してをる。「ヘンリ六世」第二部に於て（四・七・六七）彼はかく告げてをる。

「無智は神の呪ふ所、
　知識の翼を張りて我々は天に翔ける。」

「アントニイ・エンド・クレオペートラ」に於て（一・二・八）彼はかく言つてをる。

「自然の無限なる秘密の書に於て、
　私は少しばかりを讀み得る。」

彼は宇宙に關して不可思議論的見解をもつてをらない如く、自然主義的見解をもつてをらない。「よく終るものは皆善い」に於て（二・三・一）、彼は此劇中の賢人なるラフィューをして、次の如く自己を表白させてをる。「人は奇蹟が無くなつたといふ。我々の哲學者は、近代の親しい事物を超自然なものとし、又無原因のものたらしめてをる。故に我々は知るべからざる恐怖に屈從しなくてはならない時、外見的の知識の中に隱れて、恐るべきものを輕んじてをる。」

此現世的詩人は人情の中に、神に關する知識の本源を見出したやうである。そして彼は人間を呼んで、「造物主の像」と言つてをる。（ヘンリ八世、三・二・四四〇）

神は正義の神である。「以尺報尺」に於て、(二・二・七六) 神は「此上もない裁判官」と呼ばれてをる。而も神は又患深い。「タイタス、アンドロニカス」には (一・一・一一七) からいふ句がある。

「汝は神の性情に近づかうとするか。
　そんなら憐みを以て之に近づけ。」

(十四)

シェークスピアの婦人の性格の、最も高貴にして、最も完全なる描寫は、「ヴェニスの商人」のポーシャである。ポーシャが法律博士及び公爵の法律顧問として坐る時、彼女の唇から、正義と憐みの讃美が聞える。そして此二個の觀念が、全く連合して、互ひに制限しあひ、高め合うてゐる比類なき一節がある。

(四・一・一七五)

「慈悲は據ろなく施すべきものではない。
　慈悲は、春の小雨の自からにして地を潤す如くに降るものぢや。
　其德澤は二重である。慈悲は、之を與ふる者に取つても
　幸福なれば、受ける者に取つても幸福なのぢや。
　慈悲は最も偉いなる人に在つて更に最も偉いなる美德となる。
　此德が君主の胸に在れば、其光は金の冠にも幾倍する。
　かの國王が手に持たせらるゝ笏は、ほんの俗界に於ける威力や
　尊敬の標章たるに過ぎないが、慈悲は目に見えぬ心の中に宿る寳で、
　永世不滅の神の德ぢや。隨つて、慈悲を以て正義を和ぐるに及んで、
　政道が始めて天道に合ふのである。人間の力が其時はじめて
　神の力に似るのである。だから猶人よ、おまへは頻りに
　正義といふことを主張するが、正義ばかりで以て裁判したなら、
　吾々共の中、只の一人として救ひを得るものはあるまい。
　お互ひに旦暮神に慈悲を祈る、其心を推し及ぼして、
　他人に慈悲を施すのが人情といふものぢや。」

(坪内氏譯に依る)

詩人の神性觀は以上の如くである。扨て彼の人情觀は何であるか。人間は遺傳と境遇の犧牲であるか。之に對する唯一の答は、人間は道德的自由があるといふ事である。人間は正義をなし、不義を避け得るといふ事である。「コライオレイナス」(二・三・三)のかの市民は、不正をなし得る事を告げられた時、「我々は自らに之を

爲す力はあるが、我々が爲す力なき事は一の力である」と答へてをる。そして「十二夜」に於て（三・四・三五一）アントニオは斯く抗議してをる。

「自然界のうちで人間の心の外にきずといふものはない。
不親切なもの丶外にかたわと言ふべきものはない。
德は美であるが、美しい惡は、
惡魔に飾りを彫された空なトランクである。」

人間は自由を有するが故に、彼等の犯罪をば、自然若くは神にかづけることはできない。「キング・リア」（一・二・一〇八）の二色の惡黨なる、エドマンドは、之を以て、犯罪者の不誠實なる辯解であることを認めてをる。

「大べらぼうな話だ。運が惡くなると、……
それは大抵自業自得であるのに……
其不仕合せの原因を、太陽や、月や、星のせいにする。
人間は天體の壓迫で、よんどころなく惡るものにもなり、
阿呆にもなるかのやうに思つて、
惡黨となるも、盜賊となるも、謀反人となるも、
同じ天體の爭ひ難い感化、大酒飲みも、うそつきも、間男も、
みんなやむを得ない星の勢力、其他人間が犯す惡といふ惡は、
何れも神のさせることゝ見なす。邪淫家の好い遁辭だ。
その淫亂根性を星のせいにするは。」（坪内氏譯に依る）

「善く終るものは悉く善い」に於て（一・一・一五五）ヘレーナはかく述べてをる。

「私たちの療法は屢〻私たちの中にあるのに、
私たちはそれを神のお蔭だと申します。運命づけられた空は、
私たちに自由活動の領分を與へますのに、私たちが愚かなため、
私たちののろくさい目論見が逆戻りいたします。」

そして「ジュリアス・シーザー」（一・二・一三五）に於てカシアスは氣高くもかく言つてをる。

「人間は時とすると運命の主人だが、
ブルータスよ、過失はわれ〳〵の星にはない。
その奴隷なるわれ〳〵自身にあるのだ。」

ドクトル・フリントは「有神論」中にかく言つてをる。「ヒンドウ人の如く、意志が元氣をもつてをらない、休息をば生活の目的として憧憬する處に於ては、神を原因、或は意志として考へる能力が無い。隨つて萬有神敎に至る不斷の傾向がある」

と。是の補足的眞理として言ひ得べきものは、個人的、及び國民的生活に意志の活動する處では、神の人格と人間の自由の強き確信がいつもあるといふことである。是れは特にエリザベス時代に於てほんとである。又此時代の最も高貴なる作者なるシェークスピアに於て著しく見られる。人間は善を爲し得るが、又自由に好んで惡をも爲し得るのである。

ロバルト・ジイ・インガソルは、シェークスピアに關する講演に於て、此詩人は罪を無智の結果に過ぎないと考へたと言つてをる。しかしシェークスピアは全く正反對の考をもつてをる。彼にとつては「欲望は思想の父」である。（ヘンリ四世第二部四・五・九三）思想が欲望の父ではない。サフォルク（ヘンリ四世、第一部二・四・七）はかく言つてをる。

「ほんとに、私は律法のなまけ者だつた。
そして律法どほりに私の意志を造れなかつた。
だから私の意志どほりに律法を造るのだ。」

そして「トロイラス」は（トロイラス・エンド・クリシイダ、四・四・九四）かく立證してをる。

「そしてわれ〳〵自身に對してわれ〳〵が惡魔なことがある。
われ〳〵がかよわいわれ〳〵の力を試みる時に。
そのかはり易い力をたのみ過ぎて。」

天使等は野心の爲に墮落した。（ヘンリ八世、三・二・四三九）そして人間も亦「ルシファー」の如く墮落する。（同、三・二・三六九）

罪は意志の亂用に始まる。しかしその亂用によつて、人間は奴隷となる。一つの罪は他の罪に至る。ペリクレースは（一・一・一三七）かう言ふ。

「一つの罪は他の罪を呼び起すのだ。
人殺しが色欲にちかいのは、焰が煙に近いやうなものである。」

リチャード三世はかく白狀する（四・二・六三）

「わしはいろんな殘酷な犯罪をやつたから、
一つの罪の結果を遁れるために他の罪を犯さなくてはならぬ」

此罪は、頑固な自己主張の固定せる狀態、神と人とを輕んずる自我の神視となる。「コライオレイナス」は（五・四・二三）「永遠に、天國で王位に即くことより外に、神に要求するものはない。」「牡虎に乳がない如く彼の内に憐はない。」

「リチャード三世」と「マクベス」に於て、希臘悲劇の唯一の許すべからざる罪、hubris の表現を見る。イヤゴーも亦すべての善を故意に憎む人間である。そしてゴ

ネリルとリーガンとは、人間性が、意識的に、又故意に、惡に從ひ得る事を示してをる。「こんな無情な心を造る、どんな原因が、自然の中にあるか」とリアが尋ねる（三・七　七五）。之に答へる言葉は、自然は決してなさなかつたところのもの、又爲し得なかつたところのものを、人間の惡意がなしたといふこと、及び人間は自己の性情を邪曲にしたが故に、全く不自然となつたといふ事である。

而も罪人は、餘りに弱くして、最早善を爲さうと努力し得ない點に達する危險があると同時に、すべての人間の中には、尙自由が多少殘つてをるし、又もつといゝ狀態へ變化する可能性がある。「ハムレット」の王が（四・七・一一七）惡行に關して言つてをる事は、善行に關しても亦眞である。

「爲ようと思ふことは、
爲ようと思うた時に爲すべきだ。然らざれば此思ふことがいろ〳〵に變化し、
舌の數、手の數、事の數の世にある限り、
うつりかはり、停滯する。
然る時は所謂「爲すべきこと」も放蕩者の消息同樣、
生中（なまなか）一時の氣休めである。」（坪内氏譯に依る）

同一の劇に於ける俳優の王は（三・二・一七一）かく宣言してをる。

「志は記憶の奴隷にして、
生るゝ勢ひは猛なれども、生立つことは覺束ない。」

そしてハムレット自ら彼の母にかく忠告してをる。（三・四・一六三）

「今宵はお忍びあれ、
すれば次の夜はやゝたやすく、
又その次は一段たやすい。
習ひは性をもかへる。
惡魔を押へつけるか、それとも不思議の力を以て、
彼を放り出してしまへる。」

こゝに「自然の燒印」、血の汚點が認められる。世界の如何なる詩人も、これ程充分に、且つ不斷に、人間の先天的墮落を認めたものはない。アテンスのタイモンは（四・三・一八）かく宣言してをる。

「直接の姦惡よりも、
我々の呪はれた天性に合致するものはない。」

「以尺報尺」に（一・二・一二〇）かゝる句がある。

「人間は、鼠が鼠取を貪つて食ふやうに、

悪いことにがち〱して、
つい飲み過ぎて死んでしまふ。」

「ハムレット」には（三・一・一一七「徳は如何に接木しても、惡き臺木の元の氣は失せぬ」と言ひ、「懋の草疲れ儲け」（一・一・一四九）にはかゝる句がある。

「人間は誰でも生れながら癖がある。
腕力に屈服しないで、特別のなさけに從ふものだ。」

又シェークスピアはすべての人間が罪人なる事を立證してをる。

「裁判をやめよ、われ〱は皆罪人だから」

と、ヘンリ六世が言つてをる。（ヘンリ六世、第二部、三・三・三一）

「墮落したことのない、或は墮落しないものは誰か」

と、タイモンは言つてをる、（一・二・一二四）。「オセロ」に於て（三・三・三一七）かゝる句がある。

「高き雲井の宮の中にも、
汚れたるものゝ入ることがある。
尊き聖者の胸の中にも、時に不淨の
邪念はびこり、
智慮判斷を昧まさすとはいはれぬ。」

ハムレットはかく白狀してをる（三・一・一二二）

「われなどは、隨分正直な生れだが、母が生んでくれなかつたらばと、怨めしく思ふ程に、高慢で、執念深くて、野心が烈しくて、自身で許しさへすれば、どんな惡事をもしかねぬ。たゞそれを調へる思案と、それの形をつくる想像と、それを行ふ時と塲合とがないばかりだ。天地の間に這ひまわる、我の如きものが、何をえせようぞ。人は悉く惡漢（わるもの）だ。誰をも賴みとするな。」

（十五）

しかし、シェークスピアは、人間が先天的に墮落してをると言つたからとて、之が爲に責任が無いと言つてをるのではない。ハムレットは神の力をば、「壞亂（えらん）の肉に觸るれば、狗兒の屍に蛆を醸す」（二・二・一八一）太陽に準へてをる。太陽はその熱を以て、死んだ犬の中に育むところの蛆に對して、責任の無きが如く、人間の心情の墮落と、それから生ずる惡に對して、神は責任をもた無いのである。我々は先天的に墮落してをるばかりでなく、犯罪をなすのである。「冬物語」に於て（一・二・六九）ポリクセイネスはリオンテスとの少年時代の交を述べてをる。

「私だちは惡行の敎義を知らなかつた。

又誰か知つてゐたと夢想もしなかつた。
若し我々があの生活をつゞけて、
我々の弱い精神が強い血氣で高く築き上げられなかつたら、
我々は神に向て、大膽に、罪を犯さないと答へたらうに。詐欺は、
我々の遺傳を除却した。」

即ちアダムの遺傳的關係は我々を犯罪者としたのでは無い。

人間の犯罪は、遺傳的にせよ、個人的にせよ、現實で、刑罰は之に對立するものである。「以尺報尺」に於て（五・一・四七〇）エスカラスがアンヂェロの犯罪を氣の毒だと思ふ心を表白する時、アンヂェロはかく答へる。

「自分はかういふあさましい後悔を釀したのを悲みます。
その後悔が慚愧の此胸を貫くので、
手前はお慈悲よりも、ひとへに死を願ひます。
死ぬが當然です。死刑を懇願いたします。」

「シンビリーン」（五・四・二二）のポーセマスは自分が妻の死の原因となつた事を考へて神に斯く願ふ。

「イモージンの尊い生命のために私の生命を取つて戴きたい、そして

之はそんなに尊くはないけれども、やはり生命です。あなたが御造りになつたものです。
人々は一々貨幣を量らないで交換します。
輕くても、その形に依て受取ります。
この生命はあなたのものですから、此生命をおとり下さい。
若しあなたが勘定をおすませになるならば、此生命をお取りになつて、
私に受取書をおわたし下さい。」

即ち、此意味は私の生命をとつて我を處分してもらひたいといふのである。

悔ゆるものゝ良心は刑罰を欲すると同時に、悔いなき人間の良心は、刑罰を期待してをる。

「かくして良心はわれ〳〵を悉く臆病者にする」

とハムレット（三・一・八三）は言つてをる。そして「ハムレット」に於ける王妃は（四・五・一七）恐怖の爲にかく言ふ。

「疵ある心の持前とて、
些細の事さへも大凶事の前觸れかと驚かるゝ。

愚かなのは覺えある身の疑ひ、
顯はるゝを憚かる素振に罪の證が現はるゝ。」

ヘンリ六世は（第二部、三・二・二三二）かく叫ぶ。

「汚れなき心情よりも強き胸甲は何か。
正き爭ひをなすものは三倍の武具に身を堅む。
不義に汚るゝ良心を有するものは、
鋼鐵に身を堅むとも、裸かにひとしい。」

罪は暫し良心の鋭ききっさきを鈍らせる。

（「アンニー・エンド・クレオペートラ、」（三・一三・一一一）

「我々が我々の醜惡の中にありて堅くなる時、
（慘ましいかな、）賢明なる神々は我々の眼を封ずる。
我々自身の泥の中に我々の明快な判斷が落ち、我々をして
我々の誤謬を崇拜せしめ、我々が混亂に向つて
濶歩する間、我々を嘲る。」

しかし良心は早晩罪人の中に眼を醒す。「テムペスト」のゴンザロは（三・三・一〇四）かく立證してをる。

一彼等の大罪は、
久しき時を經て効驗をあらはす毒藥の如く、
今こそは靈を嚙み始める。」

リチャード三世でさへも、最後にかく白狀する。（五・三・一八〇）

「おゝ臆病な良心、どうしておまへはわしを苦めるのか。
わしの良心はいろんなたくさんの舌がある。
そして其舌といふ舌がいろんな物語をやる。
そして其物語といふ物語がわしを惡黨だといふ。」

そして良心は、尙恐しい他の刑罰の豫言に過ぎない。「我々は神に優る事が出來るか」とヘンリ六世（第二部、五・二・七三）が言つてをる。そしてヘンリ五世は（四・一・一五七）氣高くもかく言つてをる。「若し犯罪者が法律を破つて、自然の刑罰を走り越したならば、假令彼等が人間の及ばない所に行き得るとしても、神から逃れる翼がない。」王はかく立證してをる。（三・三・五七）

「此亂離の現世では、
罪を犯した手といへども、黃金で鍍金すれば、正義公道をも曲げる、

けれど天上では何事も見とほし、毛頭も胡麻化すことは出來ぬ。
行爲はそのまんま暴露されて、われ〳〵は
自分らの罪に向つてゞも、
證據を擧げねばならぬ。」
キング・ジョンは（四・二・二一六）かく言つてをる。
「おゝ、天と地の間の最後の勘定が
爲される時、此手と印璽、
（即ち王子アーサ殺害の證書）が、
予を最後の刑罰に定める立證となるべきだ。」
同じ劇に於て庶子は斯く言つてをる。（四・三・一一七）
「若しおまへが此殘忍な行爲をしたならば、
廣大無邊なる惡みも及ばぬ
刑罰に定められる。ヒューバートよ。」
「ヘンリ六世」に於ける殘虐なる僧正ビーフォルトは、もう少し長生きをしたい爲に、國賓を提供するが、彼の犧牲になつた者の死を考へて惱み叫び、ヘンリが彼に、

倘、神の憐みをうける望みがあるかと問ふけれども、倒れたまゝ何の合圖をもしない。すべての文學の中、此場面よりも強く人の心を動かす場面は無い。

（十六）

來るべき世に於て應報はあるけれども、現世に於ても亦、應報がある。此世は神の支配の下にある。（ハムレット、五・二・一〇）
「荒削りは人間がしようとも、
所詮の仕上は神力である。」
「キング・リア」（五・三・一七一）に於て、エドガはかく言ふ。
「あゝ、神さまは公平なものだ、
愉快な淫逸から自業自得の苦みをおさせなさる。」
ハムレット、（一・二・二五七）
「惡事はやがて露はれやうぞ、
たとひ大地を以て、
人目を遮るとも。」
マクベス、（一・七・一〇）
「公道の公平な手は、

毒盃を盛つた者の唇へ、
其同じ毒酒を注ぎ込む。」

「リチャード三世」のバキンガム、（五・二・二三）

「かくして彼は惡人の劍をば、無理に
彼等の主人の胸に貫かせる。」

未來に於ける神の刑罰を逃れ得ないと同じく、現世に於ても、此刑罰は逃れ得ないのであるが、是れを逃れる唯一の道は、悔改と、神自身が供へ給ふた贖罪の信仰に依る外はない。

しかし我々は、此悔改なるものが、單に外形の苦行ではなく、又單に一時的の悲でない事を、特に注意したい。シェークスピアの考ふる所に依れば、罪人が尚その罪を離れず、惡をやめない所に、眞の悔悟は存在しない「ハムレット」中の王はかく叫んでをる。（三・三・五一）

「何と祈つたものであらう？
非道の毒害を御ゆるし下さいませ？
いや〳〵是ではならぬ。殺して取つた王位、
王冠、王妃をばそのまゝにしておいて、

罪だけを免さるゝことが出來ようか。
…………………
この上は何としよう。
懺悔にはいかなる罪をも滅すといふ。とはいふものゝ
眞の懺悔のできぬ時は？
おゝ、あさましや〳〵！　死のやみにも似た此胸！
改心しようと思へども、黐に取られた小鳥のやうに、
もがけばもがくほど、罪障の元のきづなに
引戻さるゝ心の苦しさ！」　（坪内氏譯に依る）

「以尺報尺」（二・三・三〇）に於て、公爵がジュリエットに告げる。

「それが當然です。が、萬一にも、此事のために耻をかいたからとて、（我身を怨まうとも、天をば怨むべきでないのに）愛敬し奉る神をば、怒らせ奉るのを、敢てかまはんと言はねばかりに、後悔なさらぬやうであると……」

ジュリエットは之に答へる。

「後悔してをります。たしかに惡い事なのですから、勿論、自業自得だと存じてをります。」

「テムペテスト」(三・三・七二) のエリエルは自然と人情とを解釋してかく言つてをる。

「その非義非道を、神々は一時御猶豫はなさつても、
御忘れはないから、すなはち海を、陸を、一切の生物を憤激せしめて、
かやうに汝等をば苦めたまふたのだ。………
その神罰を……まぬがれる道はたつた一つだ、……
眞情からの悔恨とする永き清淨の生活、それより外に道はないぞ。」

ヘンリ五世（四・一・二八七）は、彼の賠償と悲みに加ふるに、是れだけでは足らないといふ自狀をする時、初めて、眞に悔悟せる人間の、最も深い感情を表白する。

「私はもつと爲よう。
たとひ爲ることが何のやくに立たなくとも。
畢竟するに、赦しを願ふ私の悔悟が來るから。」

彼の悔悟は、罪そのもの、悔いても足りない罪の赦しを願ひ求めるのである。改悟は、人間が神の正義に負ふ負債を、自然に仕拂ふことになるといふわけではない。

又、罪の刑罰から、犯罪者をすつかり自由にするものではない。祈禱は多少利益になるかもしれない。「よく終るものは皆善い」(三・四・二五）に於て、老いたる伯爵夫人はかく言つてをる。

「どんな天の使が、
此つまらない夫を祝福するでせう？　神樣がおきゝになつて、
よろこんで、お許しなさらうとしてをる
彼女の祈が、最も偉大なる正義の怒から、
彼を救はなければ、彼は榮えることは出來ません。」

しかし唯一の眞の赦は、基督が我等の爲になせる事業に依つて與へられる。此點に於て、シェークスピアが、人間性の要求と、神の準備の充分なる事とを、完全に、且つ充分に證據立てゝをる。「よく終るものは悉く善い」に於て、ヘレーナはかく宣言してをる（二・一・一四九）

「萬事を知る神は、
外觀に依て推測する私だちとは違ひます。
天の助けを人間の行爲と爲すのは、
人間の惡しき傲慢です。」

「ヘンリ六世」(第二部、三・二・一五四)には左の語がある。

「彼の父の恐い呪から我々を自由にするために、
王位に即いたあの恐い王。」

「以尺報尺」(二・二・七三)

「人間と生れたものは、誰しもみんな一度は、其掟(おきて)に背きました。そしてそれを罰しようとおぼしめせば、どうにでもなつたのを、神さまは却てお救ひ下さいました。」

彼は「リチャード二世」(二・一・五六)に於て、

「世の贖主、マリアの子」

に就て語つてをる。又、「ヘンリ四世」(第一部、一・一・二四)に於て、

「かの尊きお方は、今を去ること
一千四百餘年前に彼地を踏ませられ、
我々のために無殘な十字架に掛からせられた。」

ことを語つてをる。「ヘンリ六世」(第二部、一・一・二〇)に於て、サリスベリは

「すべての人類のために死にたまふた彼の死に依て」

誓を立てる。そして「リチャード三世」に於て倫敦塔内のクラレンスは彼の虐殺者に切諫する。

「われ〳〵の大罪のために流せる、基督の御寶血に依て、
贖ひを受けようとあなたが望んでをられるから、私はあなたに勸める。
こゝを去つて、私に手を懸けないやうにと。」

(十七)

彼は彼の劇中のすべての人物の位置及び時に適應したことだけを言はせてをるから、彼の宗教的信念を覗ふことは出來ないといふ人があるけれども、若し彼が倫理及び宗教の大なる事實に對する立證と共に、無神論と不道德に關する他の立證を混合してをるならば、此說はほんとであるかもしれないが、後者の立證は著しく少ない。マアローに至つては、全然之と別である。彼は、人の知る如く、無神論者で、彼の人物は、道德及び基督教的信仰の兩者に對して贊否半ばしてをる。

暫くヂョーヂ・エリオットの作中の人物を調べて見たとせよ。彼等の信念、或は不信仰の表現を分類する事、私がシェークスピアを分類せんとした如くせよ。然らば、その結果、極めて異なれるもので、エリオットの懷疑說と厭世觀とは、バリムプセストの如く、その字句の下に微かにあらはれてをることを何人も疑ひ得ないのである。シェークスピア劇の人物の中に、無信仰を發見しようと思ふ人があるなら

ば、喜んでそれをしてもらひたい。若しそれがあるとすれば、そこには必ず罪の明かな結果、或は辯解があつて、文脈上、作者がそれを批難してゐるか、或は犯罪の結果によつて、兢々として眞理を認めざるを得ないやうになつてゐる。彼の倫理的判斷は決して誤謬に陷つてをらない。彼は瑞西の山人の如く、確かな脚をもつてをる。彼は惡を描くけれども、之を美なるもの、成功するものとはしてをらない。

私は熱心に調べてみた後、彼の道德的教訓の純潔なことゝ、彼の信仰の著しく健全であることゝを公言し得るのである。かの大膽剛健なる時代に自然なる、男女兩性に關する自由なる表白はあるが、肉欲的の事を微細に述べて喜んでをる所はない。フォールスタッフの如き、甘言を吐く罪人の最後は禍である。「ヘンリ五世」に於て、飲屋の主婦が彼の死を記述せる一節は實に悲壯である。

「あの人の鼻はペンやうにとんがつて、綠の野らッぱのことを、何か、ぶつ〳〵言つてをりました。『どうしたといふんです、サア、ジョン、どうしたんです。陽氣におなんなさいよ!』と私が言ひますと、『神樣、神樣、神樣!』と三四回、あの人が怒鳴りました。それで私は慰めようと思つて、神樣のことなんか、考へるもんぢやありましねえと申しました。そんな事で心配をする必要はねえやうにと思ひました。それからあの人は、足のとこにもつと着物をかけてくれと申しました。私はベッドの中へ手を突き込んで、足にさわつて見ましたら、石のやうに冷いので、膝までも、その上までも、上まで、さわつて見ました。そしてみんな石のやうに冷めとうござんした。」

サア・ジョンが「綠の野の呟き」は詩篇第二十三篇を指してをるといふと、及びこゝでシェークスピアの意味してをるとは、臨終に及んで、彼は少年時の信仰に歸り、主は彼をして綠の野に憩はしめつゝあるといふとを示すにあつたといふ近代の暗示は、主婦の心に起つたところのものでは無い。如何となれば、彼女はその思を神からそむけて、笶しい良心を慰めるとに心を注いでをつたからである。

シェークスピアには、聖母禮拜の跡もなければ、儀式によつて救が完成されると言つたところもない。しかし彼は羅馬教會の迷信を脫却してをる如く、ピューリタン主義をも脫却してをる。僧侶腐敗の時代に、彼は決して僧侶社會を罵らない。彼は最も不信心なる僧正を描いてをるけれども、彼の描ける普通の僧侶は、僧職に對する名譽である。彼の人物中で懷疑思想の傳播者はない。シェークスピア自ら信者であつたと推定するに非れば、之を説明することは出來ない。彼は神學的獨斷論者、若くは教會の或徒黨に屬するものではなかつたけれども、斷乎として基督教的經綸の根本的實體を確信してをつた。彼は淺薄なる形式を通じて、基督教的教義の根柢

まで掘り下つた。彼は、通常、教會のすべての時代に屬する眞理を握つた。若し誰かゞ、神の人格、或は基督の神格を否定するならば、彼等はシェークスピアと爭論することになる。若し誰かゞ、人間の墮落、犯罪、及び超自然的贖罪の必要を不合理であると考へるならば、シェークスピアは人情を理解しないものと斷言する覺悟がなくてはならない。

こゝに健全なる人間の心がある。彼は沈着に、聰明に、高きものと低きものとを判斷し、人生の根本的特色を描寫してをるから、我々は宛も生ける人間の如く、かうした人物に訴へるのである。彼は男女兩性の問題に對して苦心するところあつたが、僧侶に對して僻見が無かつた如く、婦人に對しても辛辣なところはない。王をも、乞食をも、彼は自然に對する同等のまことさを以て考へて居る。一佛蘭西婦人の狡猾なる口說き上手は、ヘンリの求めを容れる、カザリンの態度よりもよく描かれたものはない。一ウェルスの軍人の、學問を鼻に懸ける、頑固な勇氣は、フリューレンほどによく示されたものはない。而もシェークスピアは旅をしたことがない。彼は宮廷の人ではなかつた。彼はもと／＼商賣人であつたが、この商賣人は天才であつた。此世界に現はれた詩的想像の點に於て、最美なる天才であつた。ゲーテは博學を藝術にした。シェークスピアは決して才學の人ではなかつた。――學者的要素は、彼の劇に存してをらない。彼は彼の創造力によつて、すべての缺點を補つてをる。他の者が諳記に依つて獲得してをるところのものを、彼は洞察を以て所有する。故に彼はテーヌが言つた如く、すべてのものを理解することが出來た。即ち、兇暴なる殘忍、精練されたる寛大、くだらない滑稽と、愛の神的無邪とを理解し得たのである。リリーは又かく言つてをる「彼が拉典語を全く知らなかつたこと、及びそれよりももつと希臘語を知らなかつたことは、幸運といふものである。如何となれば、これが爲に、彼は模倣の役目を逃れたからである。彼は古典主義の法則を知らない。又彼の心的水平線は、古風の作者に依て、その境界をつけられてをらない。彼は英國詩人の中で、知的自由の無上の例であり、此二世紀の間、殆んどその最後の例である」と。

（十八）

私はシェークスピアの性格創造の普遍的要素に就て餘りくどく言ひ過ぎた。それで比喩、或は措辭の創造に就て言ふべき時は少なくなつた。比喩に就て言へば、彼は事物を單獨に見なかつたと斷言しても、少しも危險ではない。彼には一つの宇宙があつた。萬有は相依り、相扶けてをつた。或一領域內の眞理は、すべての他の領域內に於ても、類似せるものがあつた。是れは我々が所謂空想と稱する、單なる聯

想ではない。我々が想像と稱するところの、合理的結合の發見であつた。
我々の主は、思想家中、最も想像的であつたと共に、最も深き人であつた。パン、水、光、闇、海、空、鳥、獸、海の魚等は、悉く靈的教訓を教へた。シェークスピアはこれよりもやゝ低き程度に於て、又やゝ制限せられたる範圍内に於て、此想像の神的天才を有してをつた。水の如く流るゝ直喩は、不斷で、且つ自然である。我我は之を呼んで燦爛と稱することは出來ない。――それは事物の眞相を看破る力である。テニソンの妖女の如く、

「彼には、
　幽靈と、影を投げる人々とを分けてをる壁が
　透明となつた。そして彼は壁を通して、それらのものを見た。
　そしてそれらのものゝ聲が壁のうしろで語るのを聞き、
　彼等の根本の秘密、力、及び勢力を
　學んだ。」

他の詩人は、效果を得んとして無暗にあせるけれども、シェークスピアにありては、すべてが自發的である。他の詩人にありては、手落ちがあつて、詩が散文となる。シェークスピアにありては、幻と神的能力とは、彼の天性で、永久的のものと思はれる。ミルトンのシェークスピアに對する銘は眞を穿つてをる。則ち彼はかく歌つてをる。

「のろくさい苦心慘憺の藝術を耻かしめて、
　汝のやすらかな歌は流れる。」

我々は彼の想像の突進的な勢、美、及び不盡の生命力に依て、驚愕し、震蕩し、心を奪はれる。而もすべてやりすぎといふことは無い。瀑布、暴風及び疾風の如き情熱の中に、尚、我々の判斷力に訴へる節制がある。ホットスパ（熱柏車）「ヘンリ四世」第一部、四・一・九四）が

「奴の惣領息子は何處にゐます？
　あの脚の早い、氣まぐれのウェールス公爵は？
　浮世を三分五厘にしてゐた奴の仲間は？」

とたづねると、サア・リチャード・ヴァーノンはかく答へる。

「みんな武裝してゐます。みな武器を携へてゐます。
　みんな風に羽ばたく駄鳥のやうに飾り立てゝゐます。
　水から上つたばかりの鷲といふ風に羽づくろひしてゐます。
　金絲織の服はきらめき渡つて、教會の偶像の如く、

元氣は五月のやうに旺盛で、風采はまなつの太陽の如く、けばけばしく、若い山羊のやうに、ふざけ廻り、若い野牛のやうに、あばれ散らしてゐます。ハリ王子の如きは、兜を眉深に被つて、腿甲を着け、いかにも勇ましく武裝して、ゆらりと乘馬に乘られた姿は、翼のあるマーキュリそつくりでした。これから天馬を操縦して、すばらしい乘馬術をやつて見せて、人間全體を魅し去らうとしてゐるかと見えました。」（坪内氏に依る）

こゝに九つの違つた直喩がある。それが互に比類無き新しさと美とを以て連續し、それが我々の眼を眩惑する。而も感情を動かす描寫の新しさが、一つ毎に加へられ、それが悉く絶頂に達して、感覺と理性とを奪ふのである。

（十九）

性格と比喩に於て我々はシェークスピアの普遍性——人間性の普遍的要素に訴へる彼の力を見た。今や彼の作つた人物を描いてをる言葉の着物——即ち、彼の措辭に就て語らなくてはならない。此點に於ても、我々は、彼が英語の最も偉大なる增進者であることを見るのである。ミルトンの希臘語及び拉典語から取り來つて用ひたところの語數は、八千に出でないが、シェークスピアは一萬五千語を以て滿足しない。その五百語程は、彼自身の作れるもので、彼が之を用ひなかつたならば、我々の文學の中に保存されなかつたものである。「驚くべき平易」とは、是れ彼を最もよく示すところの句である。彼は言葉と事物との關係を悟る、微妙なる感覺をもつてをる。ギリシャ人は（rhema）なる同一義を以て之を表示した。ラスキンの少年の頃、鰐魚（Crocodile）といふ語が彼を驚かせたといふことである。すべての大なる詩人は、言葉の力を鋭敏に感じたものである。シェークスピアはすべての他の詩人に優つて、創世記の作者が、人間種族の墮落せる祖先の御蔭であるといつてをる、物に名をつける才能をもつてをつた。彼はすべての詩人の中で、此技術を最も容易に驅使した人である。彼の用ひる語は「ほんとに唯一の語」である。

啻に一語ばかりでない、種々の語を連合して、之を句、及び行とすることは、彼の人物、及び比喩の如く、偉大なる創造であつた。彼の詩の中には不朽の音樂がある。悲壯、或は華麗、温良、或は壯大、その塲合によつて、彼の詩は人の心の奥に届き、耳に殘る。故に神的完全の感が我々の中に起される。そして我々は思想の律動と言葉の律動とを互ひに補足せしめて、一の全體を構成せしめた、一の超自然的

叡智の新しき證據を得るのである。

悲哀を欲する者は、王子等が死んだと思はれるシンビリーンを歌ふ、悲みの歌の中に之を見出し得ないならば、何處に之を見出し得るか。（四・二・二五九）

「もう太陽の熱を恐れるな、
又恐しい冬のいかりをも。
そなたは浮世の仕事を終へて、
家にかへつて、賃銀をもろふた。
富貴な男の子も娘らも、
煙筒掃除の小供と同じ、塵とならにやならぬわい。
もう偉いもの、澁い顔をこわがるな。
そなたは暴君の打擊をのがれちまつた。
もう着物や食べものなんか心配するな。
そなたにや蘆も樫と同じだ。
王笏、學識、體格は、
みんな之に習うて、塵とならにやならぬわい。
もう電（いなづま）なんか恐れるな。
もうこわい〳〵雷（いかづち）なんかこわがるな。
誹謗や、ひどい惡口なんか恐れるな。
そなたはもうよろこびも悲みもすんだのだ。
みんな若い戀人ら、みんなの戀人らは、そなたのやうに、とうと、塵とならにやならぬわい。」（譯者に依る）

我々が嚴肅なる言葉をほしいと思ふならば、「テムペスト」のアロンゾーが、罪を白狀してをる言葉に勝り得るものはない。（三・三・九六）

「あゝ、どうも、奇怪千萬な事ぢや！　奇怪千萬な事ぢや！
どうやら海が物を言うて、彼の事の懲みを言うたやうだつた。
それから風も、ヒュー〳〵と鳴る間に、あの事を言うた。
それから雷が、あの太い、怖しい聲で、プロスペロの名を呼んで、
わしの罪惡を物凄い聲で罵つた。」　（坪内氏に依る）

或は又微妙なる美を見んと欲する者は、エリエルの歌の中に之を見出し得ないならば、何處にも之を見出されないであらう。（「テムペスト」一・二・三九五）

「五尋深き水底に、
御父上は臥したまふ。
御骨は珊瑚、眞珠こそ
そのかみ君がおんまなこ。
御體のすべて朽ちもせで、
寶と化しぬ海に入りて。
聞かずや海の女神等が
「ディーン・ドーン！」」

（坪内氏に依る）

（二十）

シェークスピアが英國の最も偉大なる詩人であつた事を英國人に信ぜしめるには、二百年を要した。しかし近頃の卓越せる作家等は、何人も之に異議を挿まうとする者はない。アングロ・サクソン民族の桂冠詩人たる冠を彼に與へることは、公平である。しかし我々は評價をなすに當つて、批評的であると共に、正當でありたい。彼の偉大は、彼の創作力に無い。彼のすべての劇の中で、彼の時代以前に見出されないものは、二つあるだけである。其二つとは「眞夏の夜の夢」と「テムペスト」で、純粋なる想像力が、此二つの作に於て絶頂に達したのである。しかし大體に於て、彼は多くの物語を他人から取來つた。彼は事件の創作者でなくして、性格の創造者であつた。

多くの死んだ劇の屑が、彼の脚下に散亂してをつた。エゼキエルの幻の中の枯骨の如く、彼等は古く、極めて乾からびたものであつた。シェークスピアが彼等の上に立つて豫言すると、靈が彼等の中にはいつた。眞の心臓が、死んだ肋骨の下に鼓動を始めた。人間の模造が息をして、動いて、話した。枯骨は、生命ある人間となつた。そして自然に忠實にして、活力を以て動き、完全にお互に區別せられ得る、眞の人物の創造と共に、それらの人間が活躍してをるいろんな複雜せる事件も亦、彼の手に依て活躍したのである。シェークスピアが借り來つた物語は、生命も、色彩も無いものであつた。彼は彼の天才の炬明を以て、之に觸れた。かくしてそは火をつけた後の花火の如く、閃き始めた。

シェークスピアは性格の創造者であるが、彼の創造せる性格は次の世界に屬するよりも、現世に屬する性格である。彼は現世的人間の詩人である。ホーマアは、自然な、客觀的方法を以て、人間の少數の模型を描いた。シェークスピアは、無限に多樣なる人間性を我々に示してをる。彼の劇中には、六百人以上の違つた人物がある。而もその一人一人が、その胸中に收めたいろんな情欲及び恐怖の、ちがつた世

界を示してをる。ヴァージルは政治的時期の詩人、羅馬の希望と文明の代表者、アウガスタス時代の歌人である。シェークスピアはすべての時代を超越してをる。彼は彼の本國なる英國の精神の中にいると同じ程容易に、希臘及び羅馬の精神にいることが出來る。そして是れ彼がすべての塲所及び時代を通じて、人間性の何なるかを知るが故である。

ミルトンはプロテスタント宗敎改革の詩人である如く、ダンテは羅馬中世敎會の詩人である。ダンテとミルトンとは、人間を見るに、重に、見えざる靈の世界との關係に於てしてをる。そして現世の生活は、天の生活の偶發的のものに過ぎない。しかしシェークスピアにとつては、現世は人間の領域であつて、未來は折々朦朧たる背景として現はれるだけである。

クォーヅワスは自然の詩人である。すべての眼に見える事物の中に散布せる、神の生命が、彼の詩の中心である。シェークスピアは自然の表面以下に達しない。それで彼が外界を見る時には、重に人間との關係に於て之を見、神の表示として之を見ない。ブラウニングは內的生命の詩人、動機を描ける劇詩人、思索的努力とその勝利を描ける詩人である。シェークスピアは哲學者ではない。彼が動機を取扱ふ時には、それが自然に行爲となつて現はれる時だけである。彼は抽象的よりも具體的なるもの丶詩人である。此現世の領域内に於て、又活動せる性格の範圍内に於て、彼は無上である。如何なる他の詩人にも優つて、彼は此現世に住むものとして、我我の知識に加へるところが多い。

彼の詩よりも偉大なる詩は、之を考へ得べく、又作られ得べきである。如何となれば自然と神とは、宇宙の想像的解釋になくてならぬ要素であつて、是等のものは彼の詩の中に大いなる役目を勤めてをらないからである。しかし人間性は神性を反映する。そして人間性の研究は、神の研究の材料となる。彼が我々に人間に就いて語つてをる所のものは、神學的思想に此上もない價値あるものである。

私は、シェークスピアの詩と、聖書の詩とを、比較するつもりは無かつた。シェークスピアはイザヤの雄辯、若くはヨブの宏壯がない。シェークスピアの爲すと公言しないものを、ヨブとイザヤとは爲すと公言してをる。則ち、そは神及び義務を敎へることである。且又私は神の靈を受けない偉大なる詩人等の價値を比較して、一を大なりとし、他を小なりとする意志はなかつた。我々はめい〳〵の詩人を呼んで、彼等獨特の領域内に於て、大であるといふ方がいゝ。しかし性格の創造に於て、シェークスピアは他のすべての者に甚だしく優つてをる。故に我々は一般の同意によつて、彼を世界の最も偉大なる現世的詩人と考へるに至つたのである。世界は彼

にせざれる詩人を見るであらうか。その時があるとすれば、ダンテの神を見た幻、ウォーヅワスが自然を見た幻に加ふるに、シェークスピアが人間を見た幻を合せる時であらう。天の靈を受けた或詩人が、すべて是等の異れる絃を、同時に、又同様の力を以て、掻き鳴らすまで、我々はシェークスピアで滿足していゝのである。

我々はローウェルの判斷に同意を表することが出來る。彼の言ふ所によれば、「自國語のみを知つて、他の國語を知らないものは、一切の古代の大家より得られると同様の智的訓練を、シェークスピアの劇を研究する事に依て得られる。」そして是れに對する第一の理由は、シェークスピアがすべての他の詩人以上に、普遍性の能力を有し、事物の模型を摑む力を有し、又是等の模型が、具體的に表現されてをる、生ける人物を呼び起す技術を有してをるにある。

デューウィは彼の「心理學」に於て、我々の問題の高尚なる敎訓を表白せるに近い文句がある。彼はかく言つてをる。「創造的想像のすべての作品は、人間を人間に結び合せ、自然を人間に結び合せ、これを合して一の有機的全體とするところの靈の統一を無意識に立證するものである」と。我々はこゝに一つの説明を加へたい。かくの如く萬有を結び合せ、詩人の普遍的眞理、及び美に對する洞察力を可能ならしむるところの靈は、神の遍在的大靈に外ならない。此大靈が、特別に、宗敎的に

なつてをる働は、インスピレーションである。しかし此神は又すべての世俗的文學の中に活動し、之をして神自身の進歩的默示たらしめつゝあるのであると。

THE GREAT POETS AND THEIR THE OLOGY

STRONG

355
92

終